



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道の公立動物園におけるオオカミ（ <i>Canis lupus</i> ）の飼育史
Author(s)	梅木, 佳代; Umeki, Kayo
Citation	北方人文研究, 16, 65-98
Issue Date	2023-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88712
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_05_Umeki.pdf



北海道の公立動物園におけるオオカミ (*Canis lupus*) の飼育史

梅木佳代

(北海道大学大学院文学研究院)

要旨

本稿は、北海道の公立動物園でこれまでに飼育されてきた海外産オオカミ (*Canis lupus*) の記録を整理し、その動向と特徴を確認することを目的とする。

調査の結果、道内の公立動物園が1956年から2022年現在までの66年間で5亜種128頭のオオカミを飼育してきたことを明らかにできた。また、公立動物園で飼育されるオオカミには、過去には海外から「親善」のための使節として来園するなど特定の都市や地域と結びつけられる傾向がみられたが、2000年代以降は絶滅した在来種であるエゾオオカミと関連づけて飼育・展示されていることを確認した。道内の公立動物園におけるオオカミの飼育形態は、かつては単独あるいはペアを基本とする形を主流としていたが、1980年代以降は群れを飼育・展示することが目指されていた。

こうした変化は、オオカミに関わる知見の更新や議論の蓄積を反映して起きたものと考えられる。飼育史の解明を進めることで、在来種が絶滅した後の北海道におけるオオカミに対する理解のありかたやイメージの変遷過程を把握するための一助とすることができる。

1. はじめに

ハイイロオオカミ (*Canis lupus*, 以下オオカミ) は、北半球に広く生息するイヌ科の野生動物である。現在のIUCN (国際自然保護連合) のレッドリストにおける評価はLC (軽度懸念) であり (IUCN 2018)、種としての絶滅のおそれは低いとされているが、ワシントン条約 (絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約) では付属書II (一部地域の個体群は付属書I) にリストアップされ、国際取引が規制されている (CITES 2022)。

オオカミの亜種のうち北海道にかつて生息したエゾオオカミ (*C. l. hattai*) は、明治開拓期に家畜を襲う「害獣」として駆除が進められ、過度の狩猟圧により絶滅した (八田 1913、平岩 1981: 238)。道内個体群の絶滅年は1896年から1903年とされ (山田 2011: 150)、以降の北海道では野生動物としてのオオカミと人々が関わりをもつ機会が存在しなかったと考えられる。また、1905年以降は本州以南に生息したニホンオオカミ (*C. l. hodophilax*) も姿を消し (平岩 1981: 243)、日本列島全体で100年を超える在来オオカミの不在期間が存在することになる。

その一方で、現在の北海道では動物園等の飼育施設で海外産のオオカミが飼育されている。しかしながら、在来オオカミが絶滅した後の北海道で、こうした飼育下のオオカミがいつごろから存在し、どのような位置づけに置かれてきたのか、これまで明確に検討されていなかった。

1-1. 問題の背景

日本では、1990年代から絶滅したオオカミの再導入が検討されている（丸山1994：13）。これは日本列島内の自然生態系の復元、生物多様性の保全、シカ（*Cervus nippon*）等がもたらす農林業被害の抑制といった観点から、かつて頂点捕食者として存在したオオカミに着目し、海外からの個体導入により復元することを目指すものである（須田2007：50-51、桑原2014：86）。

北海道でも2000年代初頭に知床半島におけるオオカミの復元が検討され、精力的な議論がおこなわれた。2006年には、組織・管理体制や予算面、導入地におけるオオカミの収容力、社会的受容といった複数の課題に照らして現時点では実現困難であるとする結論が提示され（マックロー2006：169-179、米田2006：7）、これは現在も広く受容されている。その一方で、絶滅によりオオカミが不在となっている状況は、将来にわたる北海道の生物多様性や自然再生のありかたを考える上で常に意識される問題であり続ける。Soorae（2021）が報告するように、世界的には現在も野生動物の再導入計画の実現が続いており、日本でも今後継続的な問い直しがあると予測できる。

北海道へのオオカミ再導入に関わる大きな論点のひとつに、オオカミに対する社会的受容の可否がある（米田2006：1）。絶滅種の再導入計画では、現代の人々の対象種への理解のありかたを把握したうえで、再び地域社会に受け入れることができるのか、再導入達成後の保護・管理のための体制を築いていくことは可能なのかといった社会的側面に即した議論に取り組むことが求められる。しかし、亀山（2006：89）が指摘するとおり、北海道に暮らす人々がオオカミに対してどのようなイメージを抱いているのかはこれまで調査されたことがない。また、道内個体群を根絶するに至った時期と比較して、人々の理解の何が、いつ、どのように変化したのか、変遷の過程や影響要因を把握することも必要と思われるが、100年を超える在来オオカミの不在期間にあって、オオカミに対する一般的な理解がいかに変容しうるのか論じることは容易ではない。

こうした現状に対し、本稿は道内で飼育される海外産オオカミの存在に着目した。実在したオオカミに関わる記録や情報をまとめ、時系列に沿って位置づけることで、在来種が絶滅した後の状況を紐解くための足掛を築ける可能性がある。とくに動物園における展示では、その種に関わる研究が進む中で得られた新たな知見を表現する必要性が意識され（石田2010：116）、オオカミに関してもその時々々の主要な理解のありかたを反映した飼育・展示が目指されてきたと考えられる。将来的には北海道におけるオオカミの飼育史全体¹⁾の解明に取り組む必要があるが、本稿はそのための端緒として、道内の公立動物園で飼育されたオオカミを対象とした検討を試みる。

1-2. 関連研究の現状と本稿の位置づけ

日本国内の動物園が飼育するオオカミは、日本動物園水族館協会が策定するコレクションプランの「登録種」として血統登録が実施されているが（太田ほか2022：75）、血統登録台帳への登録は、現在飼育されている個体が主な対象とされているという²⁾。そのため、北海道で過去に飼育された

1) 近年の北海道では、公立動物園以外に私立動物園や自然教室などの民間施設によるオオカミの飼育がある。また、過去には開拓使が関わったエゾオオカミの飼育事例（山田2011：148）も知られるなど、道内のこれまでの動向を明確に把握するには対象を広げるとともに在来亜種の生存期間まで遡って検討する必要がある。

2) 2016年4月21日に国内のオオカミの血統登録を担当する群馬サファリパークへ電子メールによる問い合わせをおこない、登録の状況と傾向についてご教示いただいた。なお、他の飼育動物でも同様の状況があると考えられ、たとえば日本のペンギンの飼育史解明に取り組んだ福田（1997）では、過去の情報は

オオカミの記録をまとめたうえで、現状に至る経緯を整理する余地は残されている。

また、天王寺動物園（宮下 1993）や名古屋市東山動植物園（橋川 2011）には、オオカミの飼育歴を専門にまとめた記事が存在し、上野動物園（東京都ほか 1982b : 439）のように施設史の中に飼育記録の概要がまとめられている場合もある。本稿は、他地域の先行事例と合わせて日本全体のオオカミの飼育史解明に向けた基礎を構築する事例研究としても位置づけられるものである。

加えて、動物園で飼育される海外産オオカミと絶滅した在来種との関連づけにおいて、北海道の状況は日本国内でも特徴的な事例となる可能性がある。本州以南の在来種であるニホンオオカミは、固有種 (*Canis hodophilax*) として検討されてきた経緯があり（平岩 1981 : 201）、さらに「ニホンを冠する絶滅種」（中村 2010 : 136）として、日本の固有性と結びつけた議論がおこなわれがちであることが指摘されている。一方、エゾオオカミは、昭和初期には「北海道の狼は、日本本土の豺とは種類の異なるものでシベリヤに住む猛悪な狼であります」（犬飼 1932 : 47）などとして、シベリア地方のオオカミと同一視されていた。1931年に固有亜種として記載されたが、他地域の集団から区別しうる特徴は明確でなく（梅木 2016 : 46）、2012年にはエゾオオカミがカナダのユーコン地方に現生するオオカミと遺伝的に同じであることが明らかにされている（石黒 2012 : 228）。また、生態についても「ハイロオオカミに類似する」（今泉 1995 : 50）ことを前提として論じられ、固有亜種ではあっても海外に現生する集団から区別せずとも構わない存在とみなされてきた。飼育下の海外産オオカミに関わる情報や位置づけを明らかにする取り組みは、今後のエゾオオカミにかかる議論や研究を進めていくためにも欠かせないものである。

1-3. 本稿の目的

本稿の目的は、北海道の公立動物園でこれまでに飼育されてきた海外産オオカミの記録を整理し、その動向と特徴を確認することにある。

本稿では、北海道の公立動物園が持つオオカミの記録を整理し、飼育記録を持つ園数、飼育期間、各園で飼育された亜種・頭数および現存する標本資料数を明らかにする。加えて、新聞記事や関連文献を調査し、飼育下のオオカミをどのような存在として報道、記述してきたのかを確認する。そのうえで、得られた情報を統合し、北海道の公立動物園におけるオオカミの飼育史について、現在までの経緯や変遷の過程にみられた特徴、現存する資料とその活用方法などの観点から考察する。

2. 方法

北海道の公立動物園で飼育されてきたオオカミの情報を得るため、関連施設における資料・情報調査とヒアリングの実施、さらに文献調査、新聞調査に取り組んだ。

関連施設における調査は2016年から開始した。道内の公立動物園では、2016年6月におびひろ動物園と札幌市円山動物園（以下、円山動物園）を訪問し、台帳等資料の閲覧、ヒアリングを実施した。旭川市旭山動物園（以下、旭山動物園）は訪問による調査を実施することができなかったため、電子メールと質問票の送受を通じて情報を得た。また、道内で飼育されたオオカミの情報を得るために、関わりのある動物園や飼育施設へ必要に応じて問い合わせをおこなった。2022年8月に

文献資料を用いて分析されている。また、落合ほか（2015 : 18）は、国内のチンパンジーの飼育初期の状況解明に取り組む中で、日本で血統登録が開始された段階ですでに死亡していた過去の個体の情報は積極的に集められてこなかった様子があると指摘している。

円山動物園飼育個体の標本を所蔵する北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園(以下、北大植物園)で関連資料を確認した。

文献調査はおもに道内の図書館施設を利用して取り組んだ。また、『日本動物園水族館年報』を用いてオオカミの飼育記録を持つ施設を確認し、各園の広報誌や関連資料を収集した。

新聞調査はオンラインのデータベース「聞蔵II ビジュアル」、「ヨミダス歴史館」、「毎索」、「北海道新聞データベース」を利用して実施した³⁾。各データベース上で「オオカミ」・「狼」をキーワードとして検索し、動物園飼育個体に関わる記事を抽出した。さらに、道内のオオカミの飼育記録の概要を把握したうえで、『北海道新聞』、『十勝毎日新聞』の重点的な調査を実施した。

本文の記載にあたり、一般に刊行されていない資料に依拠した記述は脚注に典拠や説明を付記したが、例外として、旭山動物園から受領した質問票に記載がある情報を[旭山動物園質問票]、おびひろ動物園、円山動物園の動物台帳から得た記録をそれぞれ[おびひろ動物園台帳][円山動物園台帳]として本文中に出典を示す形とした。

3. 結果

本稿にかかる調査と検討を通じて、北海道の公立動物園が1950年代からオオカミを飼育してきたことを確認した。道内の公立動物園4園(旭山動物園、おびひろ動物園、釧路市動物園、円山動物園)のうち、旭山動物園、おびひろ動物園、円山動物園の3園がオオカミの飼育記録を有していた。

種としてのオオカミは複数の亜種に分類される(桑原 2014: 132-133)。道内の公立動物園では、これまでにシベリアオオカミ(*C. l. albus*)、シンリンオオカミ(*C. l. occidentalis*)、シンリンオオカミ(*C. l. lycaon*)⁴⁾、チュウゴクオオカミ(*C. l. chanco*)、ヨーロッパオオカミ(*C. l. lupus*)の5亜

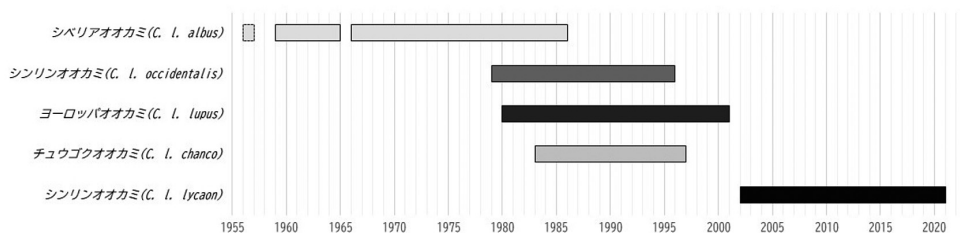


図1 亜種ごとの飼育期間 [各年12月31日時点で飼育が確認できる個体の記録から作成した。ただし、シベリアオオカミのうち【#1】については正確な飼育期間が不明なため、1956年12月31日まで生存していたと仮定して表記した]

3) 朝日新聞社「聞蔵II ビジュアル」(<https://database.asahi.com/index.shtml>)、毎日新聞社「毎索」(https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/WMAI_idcu_login.html)、読売新聞社「ヨミダス歴史館」(<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>)、北海道新聞社「北海道新聞データベース」(<https://t21.nikkei.co.jp/doshin/>)は、いずれも北海道大学附属図書館のリモートアクセスサービスにより閲覧した。

4) 北米大陸産オオカミの亜種区分について、Nowak (2003: 246) では、*C. l. lycaon* が東部の限られた地域に分布する亜種であるのに対し、*C. l. occidentalis* はアラスカ、ユーコンを含む広範囲にわたって分布する亜種であり、さらに、かつて日本で「シンリンオオカミ」として飼育された *C. l. columbianus* を内包する集団であるとされている。北米大陸産ハイイロオオカミの分類は種・亜種いずれのレベルでも議論が続いており、*C. l. lycaon* を別種 *Canis lycaon* として記載する動きもあることは、ジンマー (2012) や桑原 (2014) などを通じて日本国内にも紹介されている。

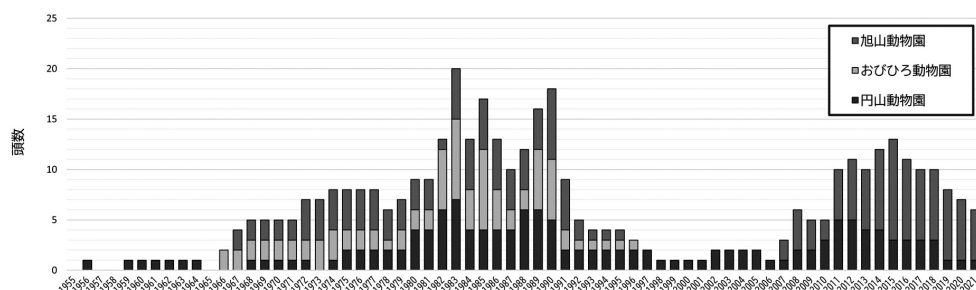


図2 北海道の公立動物園で飼育されたオオカミの個体数の変遷〔飼育園ごとに各年12月31日時点で飼育が確認できるオオカミの頭数を集計した〕

種が飼育されてきた〔図1〕。なお、和名「シンリンオオカミ」は複数の亜種に対して用いられていたため、以下では都度学名を併記した。シベリアオオカミ、シンリンオオカミ (*C. l. lycaon*)、ヨーロッパオオカミには標本資料が存在することを確認できた。

本稿は、1956年から2022年現在までの66年間で128頭のオオカミが飼育されてきたことを明らかにした〔図2〕。把握できた個体の情報は、亜種ごとの飼育開始年代順に一覧化し、〔表1〕から〔表5〕にかけて連続する番号(＃)を付した。この番号は、本文の記述にあたり、【＃1】から【＃128】の形で表記して個体の特定に利用した。

以下では亜種ごとにa) 導入、b) 繁殖・飼育形態、c) 飼育終了(現状)に至る経緯、d) 標本資料化の4つの項目を設け、これまでの主要な動向について概観する。

3-1. シベリアオオカミ (*Canis lupus albus*⁵⁾) の飼育：1956-1987年

本稿では北海道の公立動物園ではじめてオオカミを飼育したのは円山動物園であり、最初に飼育された亜種がシベリアオオカミであったことを確認した。本亜種について、道内では1956年から1987年にかけて33頭の飼育記録が確認でき〔表1〕、このうち4頭が中国から来園していた。

a) 導入

北海道の公立動物園で最初に飼育されたシベリアオオカミは、1956年に円山動物園が導入した個体【＃1】と考えられる。1951年に開園した円山動物園は、開園初期からオオカミの飼育に取り組んできたといえる。ただし、【＃1】は円山動物園が管理する台帳上には記載がなく、下記の新聞記事⁶⁾から存在を確認した。

5) この学名はおびひろ動物園が発表した繁殖記録(伊藤・中村1969:19)の記載を参照した。円山動物園、おびひろ動物園の台帳には学名の記載がなく、旭山動物園の質問票には *Canis lupus* とのみ記入されていた。

6) 【＃1】については、1956年4月17日の朝日新聞にある「中京から横浜に入港した東京船舶貨物船第十五日の丸で揚子江ワニとシベリア・オオカミ各一頭が着いた。北京動物園から送って来たもので、ワニは上野、オオカミは札幌動物園でお目見えする」(『朝日新聞』1956年4月17日3面)とする記載が初報と思われる。なお、同日付けの毎日新聞は、ワニだけでなくオオカミも上野動物園に贈られるとしており(『毎日新聞』1956年4月17日7面)、この個体は上野動物園を経由して来園した可能性がある。当時の上野動物園は中国と動物交換の話を進めていたが、1955年2月時点で北京動物園から贈られたシベリアオオカミ2頭がすでに到着していたとされる(東京都ほか1982a:468)。

表1 北海道の公立動物園で飼育されたシベリアオオカミ (*Canis lupus albus*) 一覧

#	愛称	性別	飼育園	搬入／繁殖	搬出／死亡	飼育期間	出身	備考
1	不明	♀	円山動物園	搬入：1956(昭和31)年7月12日	—\不明	不明	中国	来園時6歳、満州北部産。 円山動物園の台帳に記録なし。
2	不明	不明	円山動物園	搬入：1959(昭和34)年2月1日	死亡：1965(昭和40)年2月1日	5年5ヶ月	中国	
3	ジョン	♂	おびひろ動物園 ⇒旭山動物園	搬入：1966(昭和41)年11月10日 搬入：1967(昭和42)年6月26日	搬出：1967(昭和42)年6月13日 死亡：1979(昭和54)年5月3日	7ヶ月 11年10ヶ月	中国(北京)	北京動物園出身
4	リカ	♀	おびひろ動物園 ⇒旭山動物園	搬入：1966(昭和41)年11月10日 搬入：1967(昭和42)年6月27日	搬出：1967(昭和42)年6月13日 死亡：1978(昭和53)年7月5日	7ヶ月 11年	中国(北京)	北京動物園出身
5	ロボ	♂	おびひろ動物園	繁殖：1967(昭和42)年4月22日	死亡：1975(昭和50)年12月28日	8年7ヶ月	日本(帯広)	人工哺育で成育(伊藤・中村 1969)
6	サリー	♀	おびひろ動物園	繁殖：1967(昭和42)年4月22日	死亡：1978(昭和53)年9月12日	11年4ヶ月	日本(帯広)	人工哺育で成育(伊藤・中村 1969)
7	不明	♂	おびひろ動物園 ⇒旭山動物園 ⇒円山動物園	繁殖：1967(昭和42)年4月22日 搬入：年月日不明 搬入：1968(昭和43)年1月24日	搬出：1967(昭和42)年6月30日 搬出：1967(昭和42)年* 死亡：1973(昭和48)年1月14日	2ヶ月 不明(半年前後) 4年11ヶ月	日本(帯広)	人工哺育で成育(伊藤・中村 1969)
8	不明	♂	おびひろ動物園 ⇒旭山動物園	繁殖：1967(昭和42)年4月22日 搬入：年月日不明	搬出：1967(昭和42)年6月30日 搬出：1967(昭和42)年*	2ヶ月 不明(1年以内)	日本(帯広)	人工哺育で成育(伊藤・中村 1969)
9	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1968(昭和43)年*	搬出：1969(昭和44)年*	不明(1年前後)	日本(旭川)	
10	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1968(昭和43)年*	搬出：1969(昭和44)年*	不明(1年前後)	日本(旭川)	
11	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1968(昭和43)年*	搬出：1969(昭和44)年*	不明(1年前後)	日本(旭川)	
12	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1968(昭和43)年*	搬出：1969(昭和44)年*	不明(1年前後)	日本(旭川)	
13	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1968(昭和43)年*	搬出：1969(昭和44)年*	不明(1年前後)	日本(旭川)	
14	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1970(昭和45)年*	搬出：1970(昭和45)年*	不明(1年以内)	日本(旭川)	
15	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1970(昭和45)年*	搬出：1970(昭和45)年*	不明(1年以内)	日本(旭川)	
16	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1970(昭和45)年*	搬出：1970(昭和45)年*	不明(1年以内)	日本(旭川)	
17	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1970(昭和45)年*	搬出：1970(昭和45)年*	不明(1年以内)	日本(旭川)	
18	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1970(昭和45)年*	搬出：1970(昭和45)年*	不明(1年以内)	日本(旭川)	
19	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1970(昭和45)年*	搬出：1970(昭和45)年*	不明(1年以内)	日本(旭川)	
20	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1971(昭和46)年*	搬出：1971(昭和46)年8月13日	不明(半年以内)	日本(旭川)	
21	不明	不明	旭山動物園	繁殖：1971(昭和46)年*	搬出：1971(昭和46)年8月13日	不明(半年以内)	日本(旭川)	
22	不明	♂	旭山動物園	繁殖：1972(昭和47)年3月22日	死亡：1982(昭和57)年8月29日	10年5ヶ月	日本(旭川)	
23	不明	♀	旭山動物園	繁殖：1972(昭和47)年3月22日	死亡：1982(昭和57)年7月24日	10年4ヶ月	日本(旭川)	
24	不明	♀	旭山動物園	繁殖：1972(昭和47)年3月22日	搬出：1972(昭和47)年8月13日	4ヶ月	日本(旭川)	
25	不明	♀	旭山動物園	繁殖：1972(昭和47)年3月22日	搬出：1972(昭和47)年8月13日	4ヶ月	日本(旭川)	
26	不明	♀	旭山動物園	繁殖：1972(昭和47)年3月22日	搬出：1972(昭和47)年8月13日	4ヶ月	日本(旭川)	
27	大五郎	♂	おびひろ動物園	繁殖：1973(昭和48)年4月19日	搬出：1974(昭和49)年6月10日	1年1ヶ月	日本(帯広)	人工哺乳で成育(十勝毎日新聞社 1973)
28	不明	♂	おびひろ動物園	繁殖：1974(昭和49)年4月11日	搬出：1974(昭和49)年7月26日	3ヶ月	日本(帯広)	
29	不明	♂	おびひろ動物園 ⇒円山動物園	繁殖：1974(昭和49)年4月11日 搬入：1974(昭和49)年8月29日	搬出：1974(昭和49)年8月29日 搬出：1975(昭和50)年11月17日	4ヶ月 1年2ヶ月	日本(帯広)	
30	不明	♂	おびひろ動物園 ⇒円山動物園	繁殖：1975(昭和50)年4月5日 搬入：1975(昭和50)年10月16日	搬出：1975(昭和50)年10月16日 搬出：1984(昭和59)年1月12日	6ヶ月 8年2ヶ月	日本(帯広)	
31	不明	♀	おびひろ動物園 ⇒円山動物園	繁殖：1975(昭和50)年4月5日 搬入：1975(昭和50)年10月16日	搬出：1975(昭和50)年10月16日 搬出：1984(昭和59)年1月12日	6ヶ月 8年2ヶ月	日本(帯広)	
32	不明	♂	おびひろ動物園	繁殖：1975(昭和50)年4月5日	搬出：1975(昭和50)年10月16日	6ヶ月	日本(帯広)	
33	ジベリオ	♂	おびひろ動物園 ⇒旭山動物園	繁殖：1979(昭和54)年4月5日 搬入：1979(昭和54)年9月30日	搬出：1979(昭和54)年* 死亡：1987(昭和62)年2月16日	4年 7年4ヶ月	日本(帯広)	愛称は十勝毎日新聞社(1978)等より確認

[本表は「旭山動物園開園票」[おびひろ動物園台帳] [円山動物園台帳] から作成し、出生後1ヶ月を超えて生存した明確な記録が確認できる個体を記載した。ただし、外部への移動等により追跡が不可能な個体は搬出時点の記録を記入した。細部に個別の典拠がある場合は備考欄に記入した。日付の入力に際して月・日が不明なデータには「*」を付した(以下、[表5]まで同じ)。

円山動物園に中国との動物交換で送られてきたシベリア・オオカミが十一日札幌に到着、動物園入りした。札幌の円山動物園にオオカミが仲間入りしたのははじめて。これはメスの六歳、満州北部産のどうもうなシベリア・オオカミだが、一見シェパードそっくり。しかし人にはなかなかつかず、らんらんとした眼を輝かせながら、隣のオリのクマにほえつくなど凶暴そのもの。近く一般から募集して愛称をつけるという(北海道新聞社 1956:8)

ここでは産地などの詳細な情報に加えて当該個体の写真も掲載され[図3]、記事が書かれた時点でシベリアオオカミ1頭が存在したことは確実といえる。しかし、なぜ円山動物園に公式の記録が残らなかったのか、明確な理由は確認できなかった。同園の台帳に記載がある中では1959年に中国との動物交換により来園した性別不明の個体【#2】が最初に飼育されたオオカミとなるが、こちらは来園にいたる詳しい経緯がわかる資料を見つけることができなかった。

円山動物園に続いて、おびひろ動物園、旭山動物園が連続してシベリアオオカミの飼育を開始したが、下記の記事にみられるとおり、やや複雑な経緯がある。

中国の北京動物園から旭川市立旭山動物園に寄贈されたシベリアオオカミ二頭が十日、帯広市のおびひろ動物園に預けられた。セパードよりひと回りも大きいこのオオカミは、ことし五月、旭川の市議会議員が中日友好協会の招きで訪中したさい、北京で“子供たちのために”と寄贈を

頼んだところ快く贈ってくれた。ところが肝心の旭山動物園は未完成。明年五月には完成するので、それまでおびひろ動物園に“間借り”することになった。／札幌の円山動物園にもこの春までいたが死んでしまい、道内には他にいない大事な預かりもの。それだけに、飼育係もたいへんな気の使いようだが、遠く海を渡ってきたオオカミは『非常によく飼いならされており、まるで“借りてきたネコ”のようだ』そう（北海道新聞社 1966：15）

記事にあるとおり、1966 年 11 月 10 日に来日した【# 3】と【# 4】は、まずおびひろ動物園に預託された。翌 1967 年 4 月に同園で出産し（伊藤・中村 1969：19）、同年 6 月に本来の飼育施設がある旭川へ移動（十勝毎日新聞社 1967：3）したことにより、おびひろ動物園と旭山動物園それぞれにオオカミの初来園、初繁殖の記録を残す結果となった。

この 2 頭は旭山動物園が開園した時点からの飼育動物として記録され、公募でジョン【# 3】、リカ【# 4】と命名された（菅野 1997：124）。後年「子だくさん」の「オオカミ夫婦」（北海道新聞旭川支社 1972：14）として新聞等でも紹介され、2009 年には絵本（小菅・あべ 2009）の題材とされるなど、初期に飼育されたオオカミの中でもっとも広く知られてきた個体といえる。



図 3 円山動物園にはじめて来園したとされるシベリアオオカミ【# 1】について報じた新聞記事 [『北海道新聞』1956 年 7 月 12 日 8 面に掲載]

b) 繁殖・飼育形態

ジョン【# 3】とリカ【# 4】のペアの間には、おびひろ動物園で 1 回（1967 年 4 月 22 日）[おびひろ動物園台帳]、旭山動物園で 4 回（1968 年、1970 年、1971 年、1972 年 3 月 22 日）[旭山動物園質問票] の出産記録があり、少なくとも 22 頭の仔の育成が確認できる⁷⁾。このうち 1967 年に生まれた仔は乳母犬を用いた人工哺育で育てられ、おびひろ動物園はこの事例により日本動物園水族館

7) 旭山動物園の質問票には 1967 年にも 2 頭の仔がいたと回答をいただいたが、おびひろ動物園で 1967 年に生まれた仔のうちの 2 頭が同年 6 月 30 日に同園へ移動しているため [おびひろ動物園台帳]、本稿ではこれらを同一個体とみなした。なお、旭山動物園では 1969 年にもオオカミの繁殖があったとされる場合があり、「旭山動物園ヒストリー・昭和 44 年」(<https://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyama-zoo/2200/p008712.html>) では、1969 年に 6 頭の出産があったと記載されている。

協会から繁殖賞⁸⁾を授与されている(おびひろ動物園1978)。

おびひろ動物園は、1967年に生まれた仔のうちの2頭を飼育し、公募によりロボ【#5】、サリー【#6】と命名した(十勝毎日新聞社1968:5)。同園の台帳には、この2頭の間に4回(1969年4月21日、1973年4月19日、1974年4月11日、1975年4月5日)の繁殖があり、合計7頭の仔が成育したと記載がある。このうち1973年に生まれた大五郎⁹⁾【#27】は「人工哺乳」で育てられ、これは「わが国では初めて」(十勝毎日新聞社1973:7)の事例だったとされる。

シベリアオオカミの繁殖・飼育では、後に飼育される亜種とは異なる形態がとられていた。円山動物園は、1956年から1975年まで【#1】【#2】【#7】【#29】の4頭をすべて単独で飼育した。また、当時オオカミの繁殖に取り組んでいた旭山動物園、おびひろ動物園も、ペア2頭での飼育を基本としていた。生まれた仔の大半は生後数ヶ月で外部へ搬出され、両園で繁殖した個体のうち1年以上出生園で飼育されたのは、人工哺育個体である大五郎【#27】と、継代飼育を目的としただろろ【#22】【#23】およびジベリオ【#33】のみだった。また、おびひろ動物園では生まれた仔を両親と同居させていた様子があるが(伊藤・中村1969:19)、旭山動物園では繁殖に際して父親個体を隔離し、母親個体のみに子育てをさせていたとする言及がみられた(菅野1997:126、小菅2013:117)。この時期には、オオカミを親子あるいは群れとして飼育・展示する意向は確認できず、そのための環境も整っていなかったと考えられる。

道内では、ジョン【#3】とリカ【#4】を創始個体とし、その仔であるロボ【#5】とサリー【#6】、さらにこの2頭の間に【#30】【#31】およびジベリオ【#33】が生まれ、3代にわたる継代飼育に成功していた¹⁰⁾。しかし、結果として近親交配¹¹⁾が進み、円山動物園が飼育した【#30】

8) 日本動物園水族館協会は、1957年に繁殖技術の向上を目的とした「繁殖賞」制度を設け、各種の動物を日本で最初に繁殖させた園館を表彰している(石田2010:124)。なお、これまでに日本の動物園でみられたオオカミの繁殖記録が整理されたことはないが、上野動物園や天王寺動物園の記述をみると、出産自体はあっても生まれた仔が成育しなかった様子がある。上野動物園が飼育するオオカミには「毎年こどもを産むんだけど、どうも育たないんですね(後略)」(古賀1957:23)と言及した例が確認できる。また、大阪市天王寺動物園(1966:7)では「昭和39年3月にやってきた“ヨーロッパおかみ夫婦”(当時1才半)にもオメデタが近く(中略)無事出産ということになれば、わが国では初めてだけに係員は今から“ワクワク”しています」とあるが、この続報はみられなかった。宮下(1993:12)では同園最初の繁殖は1974年のチョウセンオオカミでみられたとされていることから、このときは成育に至らなかったと考えられる。1960年代までの日本では、オオカミはペアで同居させれば出産に至ることもあるが、生まれた仔は成育しにくい動物とみなされていた可能性がある。

9) 当時の新聞には「同園にオオカミが生まれたのは三回目。最初は四十五年に生まれたが死産、昨年は生後二日目に両親のロボとサリーが口にくわえて殺してしまった。再びこのようなことがないように一と、同園ではこの“大五郎”をすぐ親から離し」(『十勝毎日新聞』1973年8月24日7面)たとする経緯の記載がある。なお、ミクロシ(2014:89)は、オオカミの社会関係と配偶について既存の情報をまとめる中で、野生下のオオカミでは仔殺しの報告例がないが、飼育下のオオカミの群れでは仔殺しはとくに珍しいことではないと言及している。

10) 旭山動物園、おびひろ動物園ともに動物業者や本州以南の飼育施設に繁殖個体を搬出していたため、さらなる継代がみられた可能性はある。ただし、旭山動物園で繁殖した個体については、子孫が残らなかったと言及した文献が確認できている(菅野1997:125)。

11) 日本の動物園における過去のオオカミの繁殖記録中には、近親交配にあたる事例が複数みとめられる。しかし、本稿で扱う事例にもみられるように、海外から導入された創始個体がそもそも同腹きょうだいだった場合もある。当時のオオカミの繁殖にかかる知見や一般的な考えかたを理解するためには、背景となる国内外の動向から広く解明していく必要がある。

【#31】は、6年にわたりペアとして同居飼育されていたものの繁殖には至らなかったようである(北海道新聞社 1981: 14)。

c) 飼育終了に至る経緯

北海道の公立動物園におけるシベリアオオカミの飼育は、飼育下最後の個体となったジベリオ【#33】が1987年に死亡した記録を最後として途絶えている。本州以南では2014年までシベリアオオカミが飼育されていたことが確認できるが(立野 2014: 24)、道内の公立動物園が本亜種の飼育を再開することはなかった。

d) 標本資料化

本稿では過去に飼育されたシベリアオオカミのうち3個体分の標本資料が現存することを確認した。旭山動物園は剥製標本1点を所蔵し、動物資料展示館で展示している。ただし、この標本に該当する個体は不明とされる[旭山動物園質問票]。また、円山動物園のシベリアオオカミ2個体分の標本が北大植物園に所蔵されていたが、こちらも個体の特定には至らなかった。



図4 北大植物園が所蔵する HUNHM13316 (本剥製) の写真 [北大植物園提供]

北大植物園が所蔵するオオカミ類の標本のうち、円山動物園飼育個体のものとされるのは、HUNHM13316 と HUNHM45348 の2つの資料である。HUNHM13316 は、本剥製 [図4]・全身骨格・頭骨標本が揃った資料であり、「シベリヤオオカミ♀」「札幌市円山動物園にて死亡」「1965.4.26」という資料情報が付属する。一方、HUNHM45348 は頭骨標本であり、「シベリアオオカミ♀」「*Canis lupus*」「札幌円山動物園飼育」とする資料情報が付属する。しかし、いずれもメス個体の標本とされるのに対し、円山動物園の台帳に記載がある個体の内訳は、メス1頭(【#31】)、オス3頭(【#7】【#29】【#30】)、性別不明1頭(【#2】)であり、ここに非公式ながら新聞記事でメスであると明言される【#1】が加わることになる。より多くの資料情報が付属する HUNHM13316 には各個体との関連を検討する余地もみられたが¹²⁾、現段階では飼育個体と標本資料とを明確に結びつけ

12) HUNHM13316 に付随する資料情報のうち「1965年4月26日」は資料の収集日と考えられ、だとすると1974年生まれの【#31】が該当することはありえない。また、【#1】は、メスであると新聞記事中で明言されるが、同時に1956年7月に記事が書かれた時点ですでに6歳だったとされ、以後1965年頃まで生きたとすれば15歳前後の老齢個体だったことになる。近年の動物園では飼育下オオカミの長寿化が進んでいるが、1990年代まで日本の動物園で飼育されたオオカミの長期飼育記録として明確に知られていたのは、1954年から1967年まで13年にわたり上野動物園で飼育され、推定年齢14歳5ヶ月で死亡したヨーロッパオオカミのものだった(日動水協運営委員会教育指導部編 1992: 22-23)。そのため、ほぼ同時期に飼育された【#1】が、この記録に匹敵するような長寿個体だったとすれば、動物園側が記録に残さず、関連文献でもまったく言及されないとは考えがたい。メスであることが明らかな前記2頭が該当しないとすると、可能性が残るのは生時の性別が明記されない【#2】のみとなる。なお、【#2】が1965

るには至らなかった。

3-2. シンリンオオカミ (*Canis lupus occidentalis*) の飼育：1979-1997 年

1979 年、カナダ産の「シンリンオオカミ」が北海道の公立動物園にはじめて導入された。導入園となったおびひろ動物園の台帳には「*Canis lupus occidentalis*」と記入があることから、現在の道内で飼育されているシンリンオオカミ (*C. l. lycaon*) とは分類上異なる亜種となる。

道内では、1979 年から 1997 年にかけて 53 頭のシンリンオオカミ (*C. l. occidentalis*) の飼育記録がある〔表 2〕。このうち【#34】【#35】の 2 頭がカナダからの輸入個体であり、このほかの 51 頭

表 2 北海道の公立動物園で飼育されたシンリンオオカミ (*Canis lupus occidentalis*) 一覧

#	愛称	性別	飼育園	搬入／繁殖	搬出／死亡	飼育期間	出身	備考
34	不明	♂	おびひろ動物園	搬入：1979(昭和54)年9月26日	——\ 不明	不明	カナダ(アルバータ州)	1979(昭和54)年生、バリー ZOO 出身。
35	不明	♀	おびひろ動物園	搬入：1979(昭和54)年9月26日	——\ 不明	不明	カナダ(アルバータ州)	1979(昭和54)年生、バリー ZOO 出身。
36	不明	♀	おびひろ動物園	繁殖：1982(昭和57)年4月22日	死亡：1982(昭和57)年9月4日	4ヶ月	日本(帯広)	
37	不明	♂	おびひろ動物園	繁殖：1982(昭和57)年4月22日	搬出：1983(昭和58)年2月22日	10ヶ月	日本(帯広)	
38	不明	♀	おびひろ動物園	繁殖：1982(昭和57)年4月22日	搬出：1983(昭和58)年2月22日	10ヶ月	日本(帯広)	
39	不明	♂	おびひろ動物園 ⇒旭山動物園	繁殖：1982(昭和57)年4月22日 搬入：1983(昭和58)年3月9日	搬出：1983(昭和58)年3月9日 死亡：1991(平成3)年5月29日	11ヶ月 9年2ヶ月	日本(帯広) 日本(帯広)	
40	不明	♀	おびひろ動物園 ⇒旭山動物園	繁殖：1982(昭和57)年4月22日 搬入：1983(昭和58)年3月9日	搬出：1983(昭和58)年3月9日 搬出：1992(平成4)年10月31日	11ヶ月 10年7ヶ月	日本(帯広) 日本(帯広)	
41	不明	♂	おびひろ動物園	繁殖：1983(昭和58)年4月30日	死亡：1984(昭和59)年1月10日	8ヶ月	日本(帯広)	
42	不明	♂	おびひろ動物園	繁殖：1983(昭和58)年4月30日	死亡：1984(昭和59)年1月12日	8ヶ月	日本(帯広)	
43	不明	♀	おびひろ動物園	繁殖：1983(昭和58)年4月30日	死亡：1984(昭和59)年1月12日	8ヶ月	日本(帯広)	
44	不明	♂	おびひろ動物園	繁殖：1983(昭和58)年4月30日	搬出：1984(昭和59)年10月15日	1年5ヶ月	日本(帯広)	
45	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1983(昭和58)年4月30日	搬出：1985(昭和60)年5月25日	2年	日本(帯広)	
46	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1983(昭和58)年4月30日	搬出：1987(昭和62)年7月16日	4年2ヶ月	日本(帯広)	
47	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1984(昭和59)年4月10日	死亡：1984(昭和59)年5月20日	1ヶ月	日本(帯広)	
48	不明	♂	おびひろ動物園	繁殖：1984(昭和59)年4月10日	搬出：1984(昭和59)年6月16日	2ヶ月	日本(帯広)	
49	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1984(昭和59)年4月10日	死亡：1984(昭和59)年6月25日	2ヶ月	日本(帯広)	
50	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1984(昭和59)年4月10日	死亡：1984(昭和59)年6月26日	2ヶ月	日本(帯広)	
51	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1984(昭和59)年4月10日	死亡：1984(昭和59)年6月26日	2ヶ月	日本(帯広)	
52	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1984(昭和59)年4月10日	死亡：1984(昭和59)年6月27日	2ヶ月	日本(帯広)	
53	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1984(昭和59)年4月10日	死亡：1984(昭和59)年6月27日	2ヶ月	日本(帯広)	
54	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1984(昭和59)年4月10日	死亡：1984(昭和59)年6月28日	2ヶ月	日本(帯広)	
55	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1985(昭和60)年4月1日	死亡：1985(昭和60)年5月24日	1ヶ月	日本(帯広)	
56	不明	♀	おびひろ動物園	繁殖：1985(昭和60)年4月1日	搬出：1985(昭和60)年5月24日	1ヶ月	日本(帯広)	
57	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1985(昭和60)年4月1日	搬出：1986(昭和61)年4月19日	1年	日本(帯広)	
58	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1985(昭和60)年4月1日	搬出：1986(昭和61)年4月19日	1年	日本(帯広)	
59	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1985(昭和60)年4月1日	搬出：1986(昭和61)年4月19日	1年	日本(帯広)	
60	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1985(昭和60)年4月1日	搬出：1986(昭和61)年4月19日	1年	日本(帯広)	
61	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1985(昭和60)年4月1日	搬出：1987(昭和62)年7月16日	2年3ヶ月	日本(帯広)	
62	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1986(昭和61)年4月14日	搬出：1986(昭和61)年4月25日	11日	日本(帯広)	
63	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1986(昭和61)年4月14日	搬出：1986(昭和61)年4月25日	11日	日本(帯広)	
64	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1986(昭和61)年4月14日	搬出：1986(昭和61)年4月25日	11日	日本(帯広)	
65	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1986(昭和61)年4月14日	搬出：1986(昭和61)年4月25日	11日	日本(帯広)	
66	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1986(昭和61)年4月14日	搬出：1986(昭和61)年4月25日	11日	日本(帯広)	
67	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1986(昭和61)年4月14日	搬出：1986(昭和61)年4月25日	11日	日本(帯広)	
68	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1986(昭和61)年4月14日	搬出：1986(昭和61)年4月25日	11日	日本(帯広)	
69	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1986(昭和61)年4月14日	搬出：1986(昭和61)年4月25日	11日	日本(帯広)	
70	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1986(昭和61)年4月14日	搬出：1986(昭和61)年4月25日	11日	日本(帯広)	
71	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1987(昭和62)年4月5日	搬出：1987(昭和62)年4月28日	23日	日本(帯広)	
72	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1987(昭和62)年4月5日	搬出：1987(昭和62)年4月28日	23日	日本(帯広)	
73	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1987(昭和62)年4月5日	搬出：1987(昭和62)年4月28日	23日	日本(帯広)	
74	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1987(昭和62)年4月5日	搬出：1987(昭和62)年4月28日	23日	日本(帯広)	
75	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1987(昭和62)年4月5日	搬出：1987(昭和62)年4月28日	23日	日本(帯広)	
76	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1987(昭和62)年4月23日	搬出：1987(昭和62)年4月28日	5日	日本(帯広)	
77	不明	不明	おびひろ動物園	繁殖：1987(昭和62)年4月23日	搬出：1987(昭和62)年4月28日	5日	日本(帯広)	
78	不明	♂	おびひろ動物園	繁殖：1989(平成元)年4月27日	搬出：1989(平成元)年11月17日	6ヶ月	日本(帯広)	
79	不明	♂	おびひろ動物園	繁殖：1989(平成元)年4月27日	搬出：1991(平成3)年5月27日	2年1ヶ月	日本(帯広)	
80	不明	♂	おびひろ動物園	繁殖：1989(平成元)年4月27日	搬出：1991(平成3)年5月27日	2年1ヶ月	日本(帯広)	
81	不明	♀	おびひろ動物園	繁殖：1989(平成元)年4月27日	搬出：1991(平成3)年5月27日	2年1ヶ月	日本(帯広)	
82	不明	♀	おびひろ動物園	繁殖：1989(平成元)年4月27日	搬出：1991(平成3)年5月27日	2年1ヶ月	日本(帯広)	
83	不明	♂	旭山動物園	繁殖：1990(平成2)年4月24日	死亡：1991(平成3)年3月17日	10ヶ月	日本(旭川)	
84	不明	♂	旭山動物園	繁殖：1990(平成2)年4月24日	搬出：1990(平成2)年9月1日	4ヶ月	日本(旭川)	
85	不明	♂	旭山動物園	繁殖：1990(平成2)年4月24日	死亡：1992(平成4)年*	不明(2年前後)	日本(旭川)	
86	不明	♀	旭山動物園	繁殖：1990(平成2)年4月24日	搬出：1992(平成4)年10月31日	2年6ヶ月	日本(旭川)	

年2月1日に死亡していることをふまえると、1965年4月26日という資料情報から検討する余地がより増すが、この検討は本稿で捕捉できていないシベリアオオカミがほかに存在しないと仮定して進めることになり、確実性のある情報による補完がない状況では結論を下すことは困難と考える。

はすべて道内で繁殖した個体であった。

a) 導入

おびひろ動物園は、1979年にカナダ産の2頭のシンリンオオカミ (*C. l. occidentalis*) 【#34】【#35】の飼育を開始した〔図5〕。来園にいたる経緯について、当時の新聞は「帯広市の姉妹都市にあたるカナダ・エドモントン市のバリー動物園からプレゼントされたもの」「このプレゼントは昨年田本帯広市長がエドモントン市を訪れた際、帯広とエドモントンを結ぶ親善動物として決まった」(十勝毎日新聞社 1979: 11) と報じている。道内の公立動物園で飼育されたオオカミが都市間の「親善」を役割として担っていたことが確認できるのは、この事例が最初である。



図5 おびひろ動物園にシンリンオオカミが来園したことを報じた新聞記事『十勝毎日新聞』1979年9月27日11面に掲載]

北海道の公立動物園では、このときはじめて北米大陸産のオオカミが導入されたことになるが、この状況に言及した記事や文献は確認できなかった。新聞では「カナダを中心に生息している森林オオカミ」「シベリアオオカミよりもひと回り大きく、すでに体長が一メートル以上」(十勝毎日新聞社 1979: 11) として、従来飼育されてきたシベリアオオカミと比較すると、より大型となることに着目して紹介された様子がある。

b) 繁殖・飼育形態

おびひろ動物園の台帳には、合計8回(1982年4月22日、1983年4月30日、1984年4月10日、1985年4月1日、1986年4月14日、1987年4月5日、同年4月23日、1989年4月27日)の出産記録の記載がみられた。詳しい状況については後述するが、【#34】【#35】の間に生まれた仔は42頭ないし45頭と考えられる。

旭山動物園は、1982年におびひろ動物園で生まれた【#39】【#40】を繁殖ペアとして飼育した。このペアの間には2回(1988年4月7日、1990年4月24日)の出産が記録されていた〔旭山動物園質問票〕。ただし、1988年に生まれた仔は親が噛み殺したために育成せず、1990年の出産が「実に18年ぶり」の繁殖記録とされる(辻 1990: 2)。同園のシンリンオオカミ (*C. l. occidentalis*) の繁

殖・飼育に関しては、関連文献で子育て期の様子がたびたび取りあげられている。旭山動物園では、このときはじめて父親個体を子育てに参加させ、その様子が人気を博していたという（菅野 1997：127、小菅 2013：116-118）。

一方、おびひろ動物園は、本亜種において「群れ」の飼育・展示を試みた様子がある。同園の台帳に記載される飼育個体数の出入りや増減を確認すると、1984年から1987年にかけて4～8頭、1990年から1991年にかけて6頭が同時に飼育されていた期間がある。また、数日間のみ状況ではあるが、1986年4月14日から19日にかけて、新生児を含むと合計17頭（両親【#34】【#35】、1983年生まれ【#46】、1985年生まれ【#57】～【#61】、1986年生まれ【#62】～【#70】）ものオオカミが園内に存在していた。

さらに、1987年には4月5日に5頭、4月23日に2頭の出産が記録され、複数頭のメスが同時に繁殖したという。これは現在でも国内では数例のみが知られる珍しい状況で、おびひろ動物園では繁殖ペアである【#34】【#35】のほか、継続飼育されていた1983年生まれの【#46】、1985年生まれの【#61】が関わった可能性がある。【#46】と【#61】の個々の性別は不明だが、1987年7月に「つがい」として他園へ移動している（秋田市役所 1987：2）。

c) 飼育終了に至る経緯

道内のシンリンオオカミ（*C. l. occidentalis*）の飼育は、1990年代に終了した。旭山動物園は、1992年に【#40】【#86】の2頭を他園へ搬出する形で本亜種の飼育を終えている。おびひろ動物園では1991年より後の記録が台帳に記載されていなかったため、それ以降の動向と、創始個体である【#34】【#35】の情報を追跡できていないが、同園の公式ホームページで公開されている記録によると、1997年10月14日に死亡した個体が最後の1頭だったと考えられる（生涯学習部生涯学習文化室動物園管理係 2020）。

なお、おびひろ動物園ではこれ以降新たな亜種・個体を導入しておらず、オオカミの飼育そのものが途絶えている。

d) 標本資料化

本稿ではシンリンオオカミ（*C. l. occidentalis*）が標本資料化された事例を確認できなかった。

3-3. ヨーロッパオオカミ（*Canis lupus lupus*）の飼育：1980-2002年

ヨーロッパオオカミは、北海道では円山動物園のみに飼育記録がある。本亜種は1980年から2002年にかけて飼育され、ドイツから来園した2頭を創始個体として、飼育期間中に12頭の仔が生まれている〔表3〕。

表3 北海道の公立動物園で飼育されたヨーロッパオオカミ（*Canis lupus lupus*）一覧

#	愛称	性別	飼育園	搬入／繁殖	搬出／死亡	飼育期間	出身	備考
87	ミュン	♂	円山動物園	搬入：1980(昭和55)年1月23日	死亡：1991(平成3)年8月27日	11年7ヶ月	ドイツ(バイエルン州)	来園時6歳、1974年生、ヘラブロン動物園出身。
88	ローラ	♀	円山動物園	搬入：1980(昭和55)年1月23日	死亡：1988(昭和63)年10月30日	8年9ヶ月	ドイツ(バイエルン州)	来園時8ヶ月、1979年5月生、ヘラブロン動物園出身。
89	不明	♂	円山動物園	繁殖：1982(昭和57)年4月17日	死亡：1982(昭和57)年6月16日	2ヶ月	日本(札幌)	
90	不明	♂	円山動物園	繁殖：1982(昭和57)年4月17日	搬出：1982(昭和57)年11月25日	7ヶ月	日本(札幌)	
91	不明	♀	円山動物園	繁殖：1982(昭和57)年4月17日	搬出：1982(昭和57)年11月25日	7ヶ月	日本(札幌)	
92	不明	♂	円山動物園	繁殖：1982(昭和57)年4月17日	死亡：1983(昭和58)年10月7日	1年5ヶ月	日本(札幌)	
93	不明	♀	円山動物園	繁殖：1982(昭和57)年4月17日	搬出：1984(昭和59)年3月20日	1年11ヶ月	日本(札幌)	
94	不明	♂	円山動物園	繁殖：1985(昭和60)年4月20日	搬出：1985(昭和60)年6月11日	2ヶ月	日本(札幌)	
95	不明	♀	円山動物園	繁殖：1985(昭和60)年4月20日	搬出：1985(昭和60)年6月11日	2ヶ月	日本(札幌)	
96	不明	♀	円山動物園	繁殖：1985(昭和60)年4月20日	搬出：1985(昭和60)年6月11日	2ヶ月	日本(札幌)	
97	不明	♀	円山動物園	繁殖：1985(昭和60)年4月20日	搬出：1985(昭和60)年6月11日	2ヶ月	日本(札幌)	
98	不明	♂	円山動物園	繁殖：1988(昭和63)年4月14日	死亡：1988(昭和63)年9月1日	4ヶ月	日本(札幌)	
99	不明	♀	円山動物園	繁殖：1988(昭和63)年4月14日	搬出：1988(昭和63)年11月18日	7ヶ月	日本(札幌)	
100	シド	♀	円山動物園	繁殖：1988(昭和63)年4月14日	死亡：2002(平成14)年6月26日	14年2ヶ月	日本(札幌)	

a) 導入

1980年1月23日、ドイツのヘラブルン動物園から贈られたヨーロッパオオカミ2頭が円山動物園に来園した。台帳では、2頭のうちミュン【#87】が1974年生まれ、ローラ【#88】が1979年生まれだったとされ、理由は不明ながら大きな年齢差があるペアとなっていた。

当時の札幌市では、ヨーロッパオオカミの来園に際してメディアを通じた事前告知がおこなわれた様子がある。北海道新聞は、1月5日に「札幌の姉妹都市ミュンヘン（西ドイツ）のミュンヘン・ヘラブルン動物園から札幌・円山動物園にヨーロッパオオカミがプレゼントされることになった」（北海道新聞社1980a:12）と報じ、来園予定のオオカミについても詳しく説明している。

ヨーロッパオオカミはヨーロッパ一円に生息し、春から夏にかけては家族で、冬は五〜三十頭の群れで生活している。親は春に四〜七頭の子を産み、子供は三ヶ月で離乳、一年で体長メートルほどの大人と同じ体格になる。また、このヨーロッパオオカミは『赤ずきん』『ピーターとオオカミ』などの童話で日本の子供たちにもおなじみのもの。日本の動物園では神戸市王子動物園で一頭しか飼育されていない。今回贈られて来るのは、生後一年の雄雌一頭ずつ。二十四日には札幌に到着し、二月一日からの雪まつり前までには一般公開されることになっている（北海道新聞社1980a:12）。

ここではオオカミを紹介する際に用いられがちな「獠猛さ」、「野性味の強さ」、「大きさ（巨大さ）」には一切言及がない。例示としての「赤ずきん」も、「ピーターとオオカミ」¹³⁾が併記されることで恐ろしい動物としてのイメージが払拭されている。これらの作中に登場するオオカミに共通するのは、アヒルや人間を丸飲みにすることがあったとしても、最終的には狩人等によって退治されてしまう描写であり、それが「日本の子供たちにもおなじみ」のイメージであると述べられている。

また、実際にヨーロッパオオカミが札幌に到着した際の記事〔図6〕では、関わった人物に焦点を当てた写真が掲載され、オオカミの様子を「オリの周りに黒山の人々がしがきが出来たため、二匹ともおびえるようにうずくまっては目をしばたいたいた」（北海道新聞社1980b:14）と描写している。いずれの記事も、オオカミに対して付与されがちな「猛獣」としての表現や「童話の悪役スター」（嘉納1999:28）といった属性がそぎ落とされている点において、動物園に来園したオオカミを紹介する記事として特異な内容・表現となっている。

b) 繁殖・飼育形態

円山動物園の台帳には、連続した8回の出産記録（1981年4月6日、1982年4月17日、1983年4月21日、1984年4月18日、1985年4月20日、1986年4月9日、1987年4月23日、1988年4月14日）が記載され、このうち1982年生まれの5頭、1985年生まれの4頭、1988年生まれの3頭が成育している。1982年の仔の成育は、同園におけるはじめてのオオカミの繁殖記録であるとともに

13) 「ピーターとオオカミ (Петя и волк)」は、セルゲイ・プロコフィエフ (Сергей Сергеевич Прокофьев) が1936年に作曲した子ども向けの音楽作品である。もともとはオーケストラと朗読者が演奏するための物語仕立ての曲 (菊間2021:15) だが、現在はディズニー映画作品や絵本としても知られている。要点をまとめると、次のような内容である。主人公ピーターの友だちであるアヒルがオオカミに食べられてしまい、ピーターはやはり友だちである小鳥と協力してオオカミを縄で縛りあげて捕まえる。ピーターはオオカミを追ってきた狩人を含む大人や動物たちとともにバレードをし、捕らえたオオカミを動物園へと運んでいく。曲中それぞれの登場人物・動物をあらゆる楽器と主題が決まっており、物語の最後では、食べられてしまったはずのアヒルの鳴き声が聞こえることを朗読者が指摘して、オオカミがあわてて飲み込んだために腹の中でアヒルが生きていることが明かされる。



図6 ヨーロッパオオカミの到着を報じた新聞記事[『北海道新聞』
1980年1月27日14面に掲載]

に、「姉妹都市提携十周年の年に、なによりふさわしいプレゼント」（北海道新聞社 1982a : 18）としても報じられている。

円山動物園で生まれたヨーロッパオオカミは、12頭中8頭が外部へ転出している〔円山動物園台帳〕。このうち、とくに【#90】と【#91】は海外の動物園へ転出しており、一般にも注目を集めた様子がある。当時の新聞記事は、この2頭を「円山産」のオオカミと称して報じていた（北海道新聞社 1982b : 19）。また、後年には日本から海外へ「親善使節として」（金田 1992 : 46）旅立ったオオカミであるとも言及されている。

c) 飼育終了に至る経緯

円山動物園では、ローラ【#88】が1988年、ミュン【#89】が1991年に死亡し、以降は1988年生まれのシド【#100】が2002年まで10年にわたり単独で飼育されていた〔円山動物園台帳〕。なお、1996年に旭山動物園、1997年におびひろ動物園で、それぞれ最後の飼育個体が死亡しており、円山動物園のシド【#100】は道内の公立動物園で飼育されるオオカミの最後の1頭となっていた。この当時の状況について、下記のように述べた記事がある。

（前半省略）パートナーを見つけてやれないものもいる。ヨーロッパオオカミのシド（雌、十二歳）は、札幌の姉妹都市ミュンヘンから譲り受けたつがいの娘。国内では円山動物園にしかない種だ。だが、海外から相手を得てまで繁殖に取り組む考えはない。国内の主な動物園は既に別の種類のオオカミを飼育し、一度に五、六頭生まれる子どもの引き取り手が国内で見つからないのは明らかだからだ（北海道新聞社 2000 : 28）

このほかに「国内では当園でしか飼育しておらず、さらには世界的に希少で国外からの輸入も出来ないため天寿を全うするまで一頭で飼育しなければならない」（渡邊 2000 : 66）として、輸入規制により海外から新規個体を得られない状況にあったと説明する文献も確認した。

シド【#100】は2002年6月に死亡し、道内の公立動物園から一時的にオオカミが姿を消すことになる。

d) 標本資料化

本稿では、円山動物園にヨーロッパオオカミの⁽¹⁴⁾「髹革」1点の所蔵があり(札幌市環境局円山動物園経営管理課2020:48)、エゾシカ・オオカミ舎に常時展示されていることを確認した。

3-4. チュウゴクオオカミ (*Canis lupus chanco*) の飼育: 1983-1998 年

道内のチュウゴクオオカミの飼育期間は、ヨーロッパオオカミのものと大きく重複する。このとき飼育されたのは、同亜種の中でも「黒変種」「自然変異種」(大阪市天王寺動物園1981:11)とされる系統であり、外見の特徴から「クロオオカミ」の和名で記載される場合もある。

本亜種では、1983年から1998年にかけて、旭山動物園で3頭、円山動物園で5頭、合計8頭の飼育が確認できる[表4]。道内の公立動物園で飼育されたチュウゴクオオカミは、出生率・成育率が低く、出生後1年を超えて成育したのは円山動物園で生まれた【#107】【#108】の2頭のみだった。

表4 北海道の公立動物園で飼育されたチュウゴクオオカミ (*Canis lupus chanco*) 一覧

#	愛称	性別	飼育園	搬入/繁殖	搬出/死亡	飼育期間	出身	備考
101	フラット	♂	旭山動物園	搬入: 1983(昭和58)年8月6日	死亡: 1993(平成5)年7月18日	10年4ヶ月	日本(大阪)	1983(昭和58)年2月22日生、天王寺動物園出身。
102	オブリー	♀	旭山動物園	搬入: 1983(昭和58)年8月6日	死亡: 1996(平成8)年11月6日	13年8ヶ月	日本(大阪)	1983(昭和58)年2月22日生、天王寺動物園出身。
103	ジャック	♂	円山動物園	搬入: 1983(昭和58)年12月1日	死亡: 1998(平成10)年5月28日	14年5ヶ月	日本(大阪)	1983(昭和58)年2月22日生、天王寺動物園出身。
104	不明	♀	円山動物園	搬入: 1983(昭和58)年12月1日	死亡: 1991(平成3)年4月4日	7年4ヶ月	日本(大阪)	1983(昭和58)年2月22日生、天王寺動物園出身。
105	不明	不明	旭山動物園	繁殖: 1986(昭和61)年4月23日	死亡: 1986(昭和61)年6月20日	2ヶ月	日本(旭川)	
106	不明	♀	円山動物園	繁殖: 1987(昭和62)年4月27日	死亡: 1987(昭和62)年7月3日	2ヶ月	日本(札幌)	人工哺育個体
107	不明	♂	円山動物園	繁殖: 1988(昭和63)年4月29日	搬出: 1990(平成2)年11月18日	2年6ヶ月	日本(札幌)	
108	不明	♂	円山動物園	繁殖: 1988(昭和63)年4月29日	搬出: 1991(平成3)年5月27日	3年	日本(札幌)	

道内に導入されたチュウゴクオオカミ4頭は、いずれも天王寺動物園の「平平(ピンピン)」(オス)と「義義(イーイー)」(メス)(大阪市天王寺動物園編1985:96)の間に生まれた仔である。平平と義義は、1981年に大阪市と上海市との間でおこなわれた「動物交流」によって天王寺動物園に來園した個体であり、2頭とも1980年3月26日に上海動物園で生まれたと言及されていることから(大阪市天王寺動物園1981:11)同腹きょうだいだったと考えられる。

導入園である天王寺動物園による説明を参照すると、「クロオオカミというのは中国に生息するチュウゴクオオカミの黒変種で、胸部に白斑があることを除けば全身真黒なオオカミ」(大阪市天王寺動物園編1985:95-96)、「1874年にチベットで発見され、日本で飼育されているのは、天王寺動物園だけという珍しい動物」(大阪市天王寺動物園1983a:2)とされている。さらに來園時から「珍しいものですのでぜひ繁殖を成功させたいものです」(大阪市天王寺動物園1981:11)と述べられており、希少な動物として繁殖が目指されていた。

1983年2月22日に平平と義義の間に8頭の仔が生まれ、天王寺動物園はこのうち4頭を人工哺育で育てた。その結果、親個体が育てた「自然哺育」の4頭はすべて黒色、人工哺育の4頭はすべて灰色の毛色となり、この差異は偶然生じたのか必然だったのかがたびたび議論されてきた(宮下1993:13)。北海道では旭山動物園が灰色の人工哺育個体、円山動物園が黒色の自然哺育個体を飼育していたため、両タイプを同時に観察できる環境があったことになる。

14) 円山動物園のエゾシカ・オオカミ舎には「オオカミ」の頭骨標本も展示されている。亜種や個体に明確に言及した文献は確認できていないが、過去に同園で頭骨・髹革ともにシド【#100】のものとかがったことがある。



図7 円山動物園にクロオオカミ(チュウゴオオカミ)が来園したことを報じた新聞記事〔文中「珍しい黒いオオカミ」と言及がある。『北海道新聞』1983年12月17日19面に掲載〕

a) 導入

1983年8月に旭山動物園、同年12月には円山動物園に、各2頭のチュウゴオオカミが来園した。いずれもブリーディング・ローンによる導入だったとされる(大阪市天王寺動物園1983b:5、北海道新聞社1983:19)。

旭山動物園に来園した2頭は、フラット【#101】、オブリー【#102】の愛称で呼ばれた[旭山動物園質問票]。一方、円山動物園で飼育された個体は、オスがジャック【#103】という愛称だったことは確認できたが、メス【#104】の愛称は記録されていなかった。円山動物園に来園したジャック【#103】と【#104】は、道内の公立動物園ではじめて飼育された黒毛のオオカミだったと考えられる[図7]。

b) 繁殖・飼育の展開

円山動物園で飼育されたチュウゴオオカミでは、4回(1985年5月4日、1986年4月30日、1987年4月27日、1988年4月24日、1989年4月26日)の出産が記録されていたが[円山動物園台帳]、このうち実際の産仔数と成育が確認できるのは1987年生まれメス【#106】と、1988年生まれオス2頭【#107】【#108】の記録のみである。

1987年生まれの【#106】は、人工保育で育てられたが、生後2ヶ月で死亡している。台帳には「♀(シロ)」と記入があり、毛色を指すと思われる。

1988年生まれの【#107】と【#108】は、2年を超えて円山動物園で飼育され、最終的にはどちらも外部へ搬出された。このうち【#108】は、天王寺動物園へ「返却」[円山動物園台帳]され、同園で「札幌市の円山動物園からチュウゴオオカミ(黒変種)が来園」(大阪市天王寺動物園1991:8)したと記録されていた。「黒変種」と言及があることから、こちらは黒毛個体だったと考えられる。

旭山動物園のチュウゴクオオカミでは、3回(1986年4月23日、1987年4月21日、1989年5月8日)の出産が記録されていた。このうち1986年に生まれた【#105】のみ育成した記録があるが、出生時からの虚弱により生後約2ヶ月で衰弱死している[旭山動物園質問票]。

c) 飼育終了に至る経緯

北海道の公立動物園におけるチュウゴクオオカミの飼育は1990年代に終了した。出生率の低さ、さらに生まれた仔が育成せず、飼育個体数の増加がみられなかったことが短期間での飼育終了に繋がったと考えられる状況である。

旭山動物園では、1967年の開園時から途切れることなくオオカミを飼育していたが、1996年にオプリー【#102】が死亡したことで飼育記録が中断する結果となった。当時の状況は、後年「一九九六年、旭山にいた最後のオオカミが老衰で死にました。その年は、入園者数がどん底まで落ち込み、オオカミは『つまらない』動物のまま、旭山から姿を消したのです」(坂東2014:93)、「じっとした動物に『つまらない』。オオカミが死んでも『いましたっけ?』——『誰の記憶にも残っていないなんて、オオカミに申し訳ないことをした』」(斎藤2009:2)と言及されている。

円山動物園が飼育したチュウゴクオオカミでは、ジャック【#103】が最後の個体として残り、1991年から1998年まで単独で飼育された。この時期はヨーロッパオオカミもシド【#100】のみが残る状況となっていたため、同園のオオカミ放飼場では1991年から1998年まで各亜種1頭ずつ、さらに1998年から2002年にかけては前述したとおりシド【#100】1頭のみの飼育が続いたことになる。

1980年代からオオカミの群れ飼育に取り組みはじめた道内の公立動物園は、1990年代には一転してオオカミを単独ないしペアで飼育せざるを得ない状況に置かれていた。また、ここまでみてきた種々の要因やおびひろ動物園の撤退による飼育園の減少が重なり、飼育下最後の個体の死亡をもって道内の公立動物園におけるオオカミの飼育が打ち切られてもおかしくないような厳しい状況に至っていたと考えられる。

d) 標本資料化

本稿では、チュウゴクオオカミが標本資料化された事例を確認することができなかった。

3-5. シンリンオオカミ (*Canis lupus lycaon*) の飼育：2002年-現在

北海道の公立動物園では、2002年から再び「シンリンオオカミ」が飼育されている。学名は *C. l. lycaon* とされ¹⁵⁾、過去に飼育されていた *C. l. occidentalis* とは異なる亜種となる。

現在までに旭山動物園で14頭、円山動物園で6頭、合計20頭の記録がある[表5]。このうち8頭が新規導入個体であり、後述するとおり、いずれもカナダ原産のオオカミと考えられる。

本亜種について、旭山動物園では「飼育しているのはカナダに棲息する通称シンリンオオカミです。最近のDNA研究で絶滅したエゾオオカミとカナダのシンリンオオカミはとても近縁であったことが示唆されています。また生活環境も近似している」(旭川市旭山動物園2009c:17)と言及されており、絶滅した在来種との近縁性が意識されていることが確認できる。

旭山動物園、円山動物園の両園が飼育するシンリンオオカミ (*C. l. lycaon*) は、いずれもカナダにルーツを持つと思われる個体だが、個々の来歴には大きな差がある。円山動物園が2002年から

15) 旭山動物園で飼育されるオオカミでは、亜種の表記が *C. l. lycaon* とされる場合と(中村2016:60)、*C. l. ssp.* とされる場合がある(旭川市旭山動物園2009c:57)。

表5 北海道の公立動物園で飼育されたシンリンオオカミ (*Canis lupus lycaon*) 一覧

#	愛称	性別	飼育園	搬入/繁殖	搬出/死亡	飼育期間	出身	備考
109	アンコ	♀	円山動物園	搬入:2002(平成14)年12月19日	死亡:2006(平成18)年4月23日	3年4ヶ月	日本(北九州)	2000年4月12日生、到津遊園出身(生後5ヶ月までは同園飼育(中上2011:48))。
110	キナコ	♀	円山動物園	搬入:2002(平成14)年12月19日	死亡:2013(平成25)年1月8日	10年	日本(北九州)	2000年4月12日生、到津遊園出身(生後5ヶ月までは同園飼育(中上2011:48))。
111	ケン	♂	旭山動物園	搬入:2007(平成19)年10月30日	死亡:2020(令和2)年10月10日	12年11ヶ月	カナダ(ケベック州)	2007年5月1日生、ZOO DE ST-EDOUARD 出身。
112	メリー	♀	旭山動物園	搬入:2007(平成19)年10月30日	搬出:2010(平成22)年12月2日	3年1ヶ月	カナダ(ケベック州)	2007年5月1日生、ZOO DE ST-EDOUARD 出身。
113	クリス	♀	旭山動物園	搬入:2008(平成20)年3月3日	死亡:2009(平成21)年2月7日	11ヶ月	カナダ(ケベック州)	2008年6月18日生、St. Felicien Zoo 出身、2004/10-2005は富山市ファミリーパーク飼育(富山市ファミリーパーク賛助票)。
114	ジェイ	♂	円山動物園	搬入:2008(平成20)年7月29日	死亡:2022(令和4)年5月3日	13年9ヶ月	日本(富山)	2005年4月25日生、富山市ファミリーパーク出身、2005/12-2008は群馬サファリパーク飼育。
115	マース	♀	旭山動物園	搬入:2008(平成20)年12月10日	死亡:2021(令和3)年5月25日	12年5ヶ月	カナダ	2008年4月16日生、アルバータ動物園出身。
116	ルーキ	♂	円山動物園	繁殖:2010(平成22)年5月14日	死亡:2019(令和元)年5月8日	8年11ヶ月	日本(札幌)	
117	スプリ	♂	旭山動物園	繁殖:2011(平成23)年5月4日	—\—	—	日本(旭川)	
118	チュブ	♀	旭山動物園	繁殖:2011(平成23)年5月4日	死亡:2013(平成25)年11月17日	2年6ヶ月	日本(旭川)	
119	レラ	♀	旭山動物園	繁殖:2011(平成23)年5月4日	—\—	—	日本(旭川)	
120	ショウ	♂	円山動物園	繁殖:2011(平成23)年5月9日	搬出:2019(令和元)年11月6日	8年5ヶ月	日本(札幌)	
121	ユウキ	♂	円山動物園	繁殖:2011(平成23)年5月9日	搬出:2015(平成27)年12月10日	4年7ヶ月	日本(札幌)	
122	カント	♀	旭山動物園	繁殖:2012(平成24)年4月24日	死亡:2016(平成28)年12月5日	4年7ヶ月	日本(旭川)	
123	ノンノ	♀	旭山動物園	繁殖:2012(平成24)年4月24日	搬出:2018(平成30)年11月14日	6年6ヶ月	日本(旭川)	
124	ミナ	♀	旭山動物園	繁殖:2014(平成26)年5月6日	搬出:2016(平成28)年4月14日	1年11ヶ月	日本(旭川)	
125	ワッカ	♀	旭山動物園	繁殖:2014(平成26)年5月6日	—\—	—	日本(旭川)	
126	ノチウ	♀	旭山動物園	繁殖:2015(平成27)年4月28日	—\—	—	日本(旭川)	
127	フミ	♀	旭山動物園	繁殖:2015(平成27)年4月28日	搬出:2017(平成29)年10月12日	2年5ヶ月	日本(旭川)	
128	アオイ	♀	旭山動物園	搬入:2018(平成30)年6月11日	—\—	—	カナダ(オンタリオ州)	2008年4月28日生、Northwood Zoo and Animal Sanctuary 出身、2008/12-2018は東山動物園飼育(東山動物園賛助票)。

2008年にかけて導入した3頭は、いずれも国内の継代飼育個体¹⁶⁾である。一方、旭山動物園が2007年から2018年にかけて導入した5頭は、すべて海外からの新規導入個体である。

2002年に円山動物園に來園したアンコ【#109】とキナコ【#110】は、到津遊園(現在の到津の森公園)で飼育されていた「チャンプ」(オス)と「ナッツ」(メス)の仔である[図8]。チャンプ¹⁷⁾、ナッツ¹⁸⁾の2頭は、国内で繁殖したオオカミであることは確実だと思われるが、本稿の段階ではそ

16) 円山動物園は、2008年に群馬サファリパークからシンリンオオカミ(*C. l. lycaon*)のオス1頭(ジェイ【#114】)を借り受けているが、同時に同亜種のオス1頭を群馬サファリパークに貸出しており(札幌市円山動物園経営管理課2009:52-53)、個体交換によってジェイ【#114】を導入した形となっていた。

17) チャンプの来歴を解明するには、地域資料を使用した専門的な調査を実施する必要がある。この個体の出身施設とされる宝塚ファミリーランド(宝塚動物園)は2003年に閉園している。2016年8月31日に経営母体である阪急阪神ホールディングス株式会社へ電子メールによる問い合わせをおこない、過去のオオカミの飼育にかかわる記録は確認できなかったと回答をいただいた。ほかに確認できた情報は下記①から③である。①チャンプは1993年5月時点で5歳だったとされ(西村2000:11)、2010年10月14日に円山動物園のイベントで公開された「キナコ物語」(未刊行資料)では「1989年3月13日 宝塚生まれ」と紹介があった。②宝塚動物園のオオカミの飼育状況は、1983年に出版された「シンリンオオカミの繁殖について」(荒木ほか1983)により、1976年から1982年までの動向を知ることができる。同園はサンディエゴ動物園から導入したブリティッシュコロンビアオオカミ(*C. l. columbianus*)を「シンリンオオカミ」として飼育し、繁殖にも取り組んでいた。ただし、1980年以降は亜種不明のメスとの繁殖ペアが組まれていたという。③本稿では、おびひろ動物園が1986年に性別不明の仔1頭を『宝塚Zoo』へ搬出したことを確認した[おびひろ動物園台帳]。以上の情報を統合すると、チャンプは宝塚動物園が繁殖に取り組んでいた*C. l. columbianus*、あるいはおびひろ動物園から移動した*C. l. occidentalis*のどちらかが繁殖に関わって生まれた個体だった可能性が考えられる。しかし、これはあくまで得られた情報を繋ぎ合わせた仮説にすぎないため、今後さらなる情報の収集と検討に取り組む必要がある。

18) ナッツについては、1997年の新聞記事で「北九州市小倉北区の動物園『いとうづゆうえん』のシンリンオオカミ、チャンプ(雄、七歳)の元に、兵庫県の姫路セントラルパークからナッツ(雌、六歳)が嫁入りした。オオカミの寿命(約十五年)ではまだ若く、この春にも二世誕生の可能性があるという」(朝日



図8 2010年頃に円山動物園エゾシカ・オオカミ舎に掲出されていたシンリンオオカミ (*C. l. lycaon*) の家系図 [2010年4月11日筆者撮影]

れぞれの来歴を明確に把握できていない。

2008年に群馬サファリパークから円山動物園に來園したジェイ【#114】は、富山市ファミリーパークで飼育されていた「サスケ」(オス)と「ナナ」(メス)の仔である(札幌市円山動物園2022)。サスケとナナの2頭は、いずれもカナダのオンタリオ州にある飼育施設の出身であり、それぞれ2004年1月27日に富山市ファミリーパークに來園した¹⁹⁾。

新聞社1997:33)と報じられていた。また、前掲注17の「キナコ物語」では、「1990年4月29日姫路セントラルパーク生まれ」と紹介があった。これらの情報を起点として、姫路セントラルパークへ電子メールによる問い合わせをおこない、同園から「四国のとくしま動物園から♂1♀2頭を搬入」し「平成6年4月10日より9年4月9日までの3年間飼育」していたとする回答を2016年4月6日にいただいた。さらに、この回答を受けて、とくしま動物園に電子メールで問い合わせをおこない、「1990年4月29日に♂1頭・♀2頭の出産」があり、「両親は2頭共帯広動物園生まれ、8ヶ月で來園」した個体である旨の回答を2016年9月5日にいただいた。しかしながら、おびひろ動物園で生まれた47頭のシンリンオオカミ (*C. l. occidentalis*) のうち、とくしま動物園へ移動した個体は4頭存在し [おびひろ動物園台帳]、さらに一度動物業者に搬出された個体が移動した可能性もあることから、該当する個体を確定できていない。現段階では、出生日、さらに飼育施設間の移動経緯が合致する個体が存在することから、ナツツはおびひろ動物園で飼育されたシンリンオオカミ (*C. l. occidentalis*) の子孫である可能性が高いと考えられるが、より具体的な検証を進める必要がある。

- 19) 2016年8月30日に富山市ファミリーパークへ電子メールによる問い合わせをおこない、電話および質問票の送受により「サスケ」、「ナナ」、「ハチ」(旭山動物園飼育時の愛称はクリス【#113】)を含むオオカミの個体情報をご提供いただいた。サスケはElmvale Jangle Zoo出身、ナナはKIRKLAND出身であるという。ナナの出身施設については「カナダ・オンタリオ州の野生動物センター」(読売新聞社2010:

旭山動物園は、まず2007年から2008年にかけて4頭のシンリンオオカミ (*C. l. lycaon*) を導入した。このうち、ケン【#111】とメリー【#112】は同腹きょうだいであり、カナダのケベック州にある Zoo de St-Édouard から来園した〔旭山動物園質問票〕。クリス【#113】は、やはりケベック州にある St. Felicien Zoo から2004年10月26日に富山市ファミリーパークに来園し²⁰⁾、2005年2月から秋田市大森山動物園で飼育(読売新聞社2006:35)されたのち2008年3月に旭山動物園に来園した。2008年12月に来園したマース【#115】は、カナダの「アルバータ動物園」出身とされる〔旭山動物園質問票〕。

さらに、この4頭から間を置いて、2018年にアオイ【#128】が来園した(旭川市旭山動物園2018)。アオイ【#128】は、2008年にカナダのオンタリオ州にある Northwood buffalo and exotic animals Ranch (Northwood Zoo and Animal Sanctuary) で生まれ、2008年12月4日に名古屋市東山動植物園に来園²¹⁾して以降およそ10年にわたり同園で飼育されていた個体である。

a) 導入

①2002年

円山動物園では、2002年6月にシド【#100】が死亡したことでオオカミの飼育が中断したが、同年12月のシンリンオオカミ (*C. l. lycaon*) 来園により再開した。同園は1990年代以前のシンリンオオカミ (*C. l. occidentalis*) の飼育に携わらなかったため、このときはじめて北米産オオカミの飼育を開始したことになる。

導入を報じた新聞記事では「オオカミの中で最も体が大きく」(毎日新聞社2002:21)、「体重八〇キロになることもある」(北海道新聞社2002:24)など、大型のオオカミとして紹介されているが、一方で、「どう猛なイメージに似合わず、初めて見る雪景色におっかなびっくりの様子」「おとなしい雰囲気の子オオカミ」(毎日新聞社2002:21)など、実際に来園した個体の特徴的な様子にも言及がある。また、このとき来園したアンコ【#109】とキナコ【#110】について、国内で継代飼育が続いてきた個体であることから「カナダやアラスカの森林地帯に住むが、2匹は九州生まれの双子の姉妹(中略)最近は慣れてきたが、当初は雪の上が苦手だったという」(佐藤2006:24)とし、日本国内の出身地で培った特質を持つオオカミとして言及する記事もみられた。

2006年にアンコ【#109】が死亡した際には、毎日新聞がその前後の状況をまとめた「悲しき遠ほえ」(真野2006:6)を掲載した。この2頭は姉妹で飼育され、飼育期間中に繁殖をともなったわけではなかったが、一定の知名度と飼育動物としての人気を獲得していた様子がある。

②2007-2008年

2007年から2008年にかけて、旭山動物園、円山動物園の両園が新たなオオカミの飼育展示施設を建設した。これらの施設はいずれもエゾシカ (*C. n. yesoensis*) とオオカミを隣接展示とすることで環境教育のための場とするとともに、飼育するオオカミと絶滅したエゾオオカミを関連づけるコンセプトを有していた。

旭山動物園は1996年からオオカミの飼育を中断していたが、2007年1月に新施設の建設計画があると報じられた(渡部・近藤2007:3)ことが再開のきざしとなった。建設計画にかかる報道で

28) と表記される場合もある。

20) 前掲注19

21) 2016年8月24日に名古屋市東山動植物園へ電子メールによる問い合わせをおこない、質問票の送受により、アオイ【#128】を含む同園飼育のオオカミの個体情報をご提供いただいた。

は、オオカミの「群れで疾走する姿を見せる新屋外展示施設」(北海道新聞社 2007: 32) とされ、さらに同じ敷地内で飼育・展示するエゾシカとあわせて「北海道でオオカミを絶滅させた結果」を教訓として伝えることを目指す施設であると報じられている。また、「夜空に向かってほえる」オオカミは「いかにも北海道の動物園らしい」(渡部・近藤 2007: 3) とする言及には、絶滅して久しいがために曖昧になっていた「北海道のオオカミ」のイメージが、動物園が飼育する個体によって具体的に補われていく過程の端緒がみとめられる。

旭山動物園の大型展示場「オオカミの森」は、2008 年 6 月 28 日にオープンした。開業のタイミングは同年 7 月開催の「北海道洞爺湖サミット」を意識したものだったとも述べられる(斎藤 2008: 34)。前後の報道では「開拓前の『オオカミの森』復活」、「オオカミ、シカ、人が共存していた時代を再現」(北海道新聞社 2008: 26) した施設として、過去に絶滅したエゾオオカミと関連づけた情報が発信されており、広く一般にも認識されていたと考えられる。

円山動物園による「オオカミ・エゾシカ」エリアの構想は 2007 年 5 月に報じられた。道内ゆかりの動物を紹介する「北方圏動物展示ゾーン」を構成する施設の第 1 弾として、「より野生に近い形で動物たちを見てもらう」こと、「観光客に見てもらうだけでなく、北海道への郷土愛をはぐくむ」ことを主旨とするエリアであると述べられている(郡 2007: 33)。オオカミの飼育・展示施設としては、同種が本来群れで行動する動物であるとする認識に基づき(札幌市円山動物園 2007)、複数頭からなるオオカミの群れの飼育・展示を目指す「繁殖を目的とした新獣舎」(弓山 2010: 9) として企画された様子がうかがえる。また、「動物園におけるオオカミといえば狭い空間に押し込められ、常同行動を繰り返すというイメージ」(井上ほか 2008: 161) を払拭することも意図されていた。

円山動物園の「エゾシカ・オオカミ舎」は 2008 年 4 月 11 日にオープンした。開業にあたり、展示のねらいとして「広大な大地で、オオカミがエゾシカを追いかけていた、昔の北海道の風景に思いをはせて」(本庄 2008: 23) もらうことがあると紹介されており、やはり過去の北海道に存在した環境や絶滅したエゾオオカミと関連づける意図を持つ施設として報じられている。

b) 繁殖・飼育形態

両園の新規施設におけるオオカミの飼育・展示では、あらかじめ群れを基本とする形が想定されていたが、円山動物園では雌雄のペアを導入して繁殖による群れの形成を目指し、旭山動物園では複数個体を群れとして導入したうえでペア形成と繁殖を目指すという差異がみられた。

円山動物園のエゾシカ・オオカミ舎では、2008 年 4 月のオープン当初はキナコ【#110】が単独で飼育されていたが、同年 7 月にジェイ【#114】が来園し、ペアリングが開始された。このペアの間には、2010 年、2011 年の 2 回の出産があり²²⁾、3 頭の仔が成育した。

2010 年 5 月 14 日の出産は「21 年ぶり」(朝日新聞社 2010: 32) と報じられ、生まれた仔の愛称は来園者への公募と投票によりルーク【#116】に決定した(中村 2010: 29)。翌 2011 年は 5 月 9 日から 10 日にかけて出産があり、5 頭の仔が確認されたが、このうち 3 頭は死産あるいは出生後間もなく死亡したという²³⁾。生き残った 2 頭は公募によりショウ【#120】、ユウキ【#121】と命名された

22) 10 歳で初産、さらに翌年も連続して出産したキナコ【#110】の例は日本国内では記録的な高齢出産となり、円山動物園は母体への負担を考慮して、キナコ【#110】とジェイ【#114】のペアでの繁殖は 2011 年で終了すると同年の出産が確認された段階で告知していた(未刊行資料: 札幌市円山動物園アニマルファミリー事務局「【アニマルファミリー】シンリンオオカミ『キナコ』通信 6 月号」2011 年 6 月 14 日に電子メールで配信)。世界的には飼育下のメスが 14 歳で繁殖した記録があるとされるが、9 歳を超える子産仔数が減少するともいわれている(Kreeger 2003: 193)。

(木村 2011: 31)。

旭山動物園では、新規に導入したオス1頭とメス3頭を同居させる段階で2件の事故が連続して発生し、繁殖ペアが形成されるまでに時間を要した。2008年12月10日に来園したマース【#115】は、同16日に他個体から檻越しに噛まれて前肢に重傷を負い(旭川市旭山動物園 2009b: 2)、2009年5月まで治療を受けていた(中村 2016: 60)。また、この間の2009年2月にクリス【#113】が死亡した。同居していたケン【#111】かメリー【#112】に噛まれたためとされ(北海道新聞社 2009: 21)、旭山動物園は繁殖期にかかる事態として前後の情報をまとめた記事を公表した(旭川市旭山動物園 2009a)。

上記の経緯の後、旭山動物園は2009年8月8日からケン【#111】とマース【#115】の2頭のペアリングを開始した。このペアの間では、5回(2011年5月4日、2012年4月24日、2013年4月25日、2014年5月6日、2015年4月28日)の出産があり、計9頭の仔が育成している。同園の「オオカミの森」で飼育・展示される群れの頭数は、最多時の2016年には10頭にのぼった。

旭山動物園で繁殖した個体はアイヌ語で愛称がつけられている。2011年に生まれた3頭は「チュプ(朝日)」【#118】、「ヌブリ(山)」【#117】、「レラ(風)」【#119】を合わせて「旭山に新たな風を」という意味を持たせる意図があったとされる(旭山動物園動物図書館 2011)。また、翌2012年には、過去の北海道ではアイヌ民族とエゾオオカミが共存していたことから「現在も人と野生動物が共存していきたいと、その頃をしのんで」(中沢 2012: 27)命名したとされ、以降もアイヌ語による命名が継続された。

同園で生まれた9頭の仔オオカミのうち、これまでにチュプ【#118】、カント【#122】の2頭が死亡し、ノンノ【#123】、ミナ【#124】、フミ【#127】が他園へ転出した。現在は「オオカミの森」にレラ【#119】、ワッカ【#125】、ノチウ【#126】の3頭、通常非公開のバックヤードにヌブリ【#117】が飼育されている。

園内2箇所での飼育がおこなわれているのは、2016年1月にヌブリ【#117】、ミナ【#124】、ワッカ【#125】の3頭がバックヤード飼育に切り替えられた(旭川市旭山動物園 2016a)ことが契機となっている。旭川市旭山動物園(2016a)によると、この措置は、群れを構成する個体の序列が変動を続け、近親交配や闘争が発生する可能性を考慮して講じられたという。バックヤードへ移った3頭のうち、ミナ【#124】が2016年4月に転出し(旭川市旭山動物園 2016b)、同年12月にカント【#122】が病死した(旭川市旭山動物園 2016c)。2017年以降はヌブリ【#117】の単独飼育となっていたが、2018年6月にアオイ【#128】が来園し(旭川市旭山動物園 2018)、2頭のペアリングが開始された。2021年にアオイ【#128】の発病により子宮摘出手術が行われたことで繁殖にはいたらなかったが(原田 2021: 15)、現在もバックヤードで2頭の同居飼育が続いている。

c) 現状に至る経緯

2022年現在、旭山動物園ではオオカミの飼育が続いているが、円山動物園は今後のオオカミの飼育を断念する方針を示している。

円山動物園は、2012年に他個体とのトラブルが続いていたキナコ【#110】を別飼いに切り替えた(札幌市円山動物園 2013b)。しかし、およそ10ヶ月後に檻越しの咬傷事故が発生し、キナコ【#110】は外傷・失血により死亡した(札幌市環境局円山動物園経営管理課 2013: 46、札幌市円山動物園 2013b)。繁殖経験を持つペア間、あるいは仔が親を殺したことになるこの事故は、新聞等の主要な

23) 前掲注22(『キナコ』通信6月号)

メディアで報じられるとともに経緯を伝える情報をめぐって紛糾した²⁴⁾。

2013年以降はオス4頭での群れ展示が継続されたが、2015年8月にユウキ【#121】、2015年11月にショウ【#120】がそれぞれ他個体との不和によって別飼いとなった(札幌市円山動物園 2019d)。この結果、円山動物園では一時的に4頭のオオカミを3つの飼育スペースに分けて飼育していた。その後、ユウキ【#121】が2015年12月に転出し(札幌市円山動物園 2017)、2019年5月にルーク【#116】が病死した(札幌市円山動物園 2019a)。さらに2019年11月のショウ【#120】の転出により(札幌市円山動物園 2019d)、2020年以降はジェイ【#114】の単独飼育となっていた。

この状況と前後して、円山動物園は2050年までの基本方針「ビジョン2050」の原案をまとめる中で、シンリンオオカミ (*C. l. lycaon*) の飼育から順次撤退し、今後の同園における飼育を断念する種に含める旨を発表した(石川 2018: 1)。2019年に策定された基本方針(札幌市円山動物園 2019b)では、飼育・展示する動物種を「積極的に繁殖に取り組む種(推進種)」、「状況に応じて繁殖に取り組む種(継続種)」、「やむを得ず飼育を断念する種(断念種)」に分類し、オオカミについては教育面に果たす役割は大きいと評価しながらも、下記の理由から断念種に含めている。

野生のシンリンオオカミは雌雄のつがいとその若齢仔からなる群れ(パック)を形成し、100平方キロメートルに及ぶ排他的な縄張りをもって暮らしている。群れの個体には雌雄それぞれの順位があり、繁殖は基本的に最上位の雌雄の間で行われることから、特に繁殖期前には激しい順位争いが起きることもあり、仔は一般的には性的に成熟する2歳頃には群れを離れ、つがいの相手を探す。／飼育下のシンリンオオカミにおいても、このような傾向は明らかにみられており、飼育個体間の順位争いが激化し、生命の安全のために群れや個体を分けて飼育せざるを得なくなるケースもしばしばある。当園においても仔個体が父親個体や兄弟個体に対して攻撃的な態度をとるようになったことから、他園への移動や別飼いにより対応しているが、限られた飼育スペースを分けて使用することとなるため、狭隘なスペースしか提供することが出来ない。このような状況から、当園においては、本種について雌雄でつがいを形成させ、継代的に繁殖を行っていくことは非常に困難であると判断するに至り、この種の飼育を断念する(札幌市円山動物園 2019c)

この発表の後、最後の飼育個体となっていたジェイ【#114】が2022年5月に死亡した。円山動物園の公式ホームページでは、この告知とともに、同園が飼育するシンリンオオカミ (*C. l. lycaon*) が不在となった旨を掲出している(札幌市円山動物園 2022)。

d) 標本資料化

本稿は、旭山動物園にシンリンオオカミ (*C. l. lycaon*) の骨格標本(部分)1点の所蔵があることを確認した。この標本は、クリス【#113】のものであり[旭山動物園質問票]、「オオカミの森」で常時展示されている。

また、円山動物園²⁵⁾では、2022年5月に死亡したジェイ【#114】について、現在標本化が検討さ

24) 「ホームページ等に出血死の経緯として『当初はじゃれあっているうちにエスカレートし足腰があまり良くないキナコが逃げられなかったものと推測しています。』と記載しましたが、事実確認できない推測表現でありホームページから削除し、その旨説明させていただきました」(札幌市円山動物園 2013a)。

25) 円山動物園には、ほかにシンリンオオカミ (*C. l. lycaon*) の頭骨1点が存在する可能性がある。現在の事業報告等の資料上では確認できないが、2006年7月時点で同園が所蔵していた「シンリンオオカミ」の頭骨に言及した新聞記事が存在する(『北海道新聞』2006年7月18日23面)。また、2012年9月15日に開催されたイベント「円山動物園秋祭り」においてオオカミの頭骨1点の展示があり、その場において、

れているという（札幌市円山動物園 2022）。

4. 考察

ここまで北海道の公立動物園が持つオオカミの飼育記録を整理し、現在までの主要な動向を確認してきた。以下では、北海道の公立動物園におけるオオカミの飼育史について、オオカミの導入経緯と飼育意義、繁殖・飼育形態の変遷過程、現存する標本・記録等の活用の3つの観点から考察する。

4-1. オオカミの導入経緯と飼育意義

北海道の公立動物園は、これまでに北米、ユーラシア、ヨーロッパの各大陸に分布する亜種を飼育してきた。また、飼育記録があるすべての亜種で繁殖がみられたことから、積極的にオオカミの導入と飼育に取り組んできたといえることができるだろう。

ただし、過去には広く「オオカミ」を飼育することが意識されていたと思われる。現在も飼育が続くシンリンオオカミ (*C. l. lycaon*) を除くと、いずれの亜種も国内の「主流」が切り変わることに伴って個体を確保できなくなるか、新規個体を導入する意向が失われたと思われる形で飼育が途絶えていた。また、過去に飼育された4亜種では、それぞれを北海道で飼育する意義について明確に言及した事例を確認できていない。なかでもシベリアオオカミは、かつてエゾオオカミと同一視されていた亜種だが、北海道の公立動物園への導入に際して、そうした過去の言説や両亜種の関係性が意識された様子はみられなかった。各園がオオカミを導入した経緯をみると、在来種との関連性よりも、むしろ海外の希少な動物であることに価値が見出され、都市あるいは施設間の交流の一環として導入されてきたといえる。

とくに、おびひろ動物園のシンリンオオカミ (*C. l. occidentalis*) と円山動物園のヨーロッパオオカミでは、姉妹都市間の友好を保つ「親善」のための使節として、それぞれの創始個体に明確な位置づけが与えられていた。このうち円山動物園は、ヨーロッパオオカミを「国際親善大使」や「ミュンヘン市からの使節」（札幌市円山動物園 1980：15）、「外交官」（札幌市円山動物園 1984：1）といった役割を担う動物としてたびたび紹介しており、その位置づけを強く意識していたと思われる。円山動物園のヨーロッパオオカミは、動物園で飼育される動物であると同時に都市間の「交流」や「友好」を象徴する存在であることが強く意識された結果、導入を報じる際にも「猛獣」や「悪役スター」といった属性がそぎ落とされたのではないだろうか。

渡辺（2000：47）は、相手の国に生息しない希少さを持つノン・ネイティブな珍獣こそが「外交官」の役割を担うと述べている。道内の公立動物園で飼育されたオオカミの場合も、日本には存在しない海外産動物であることの希少さが意識され、そうした特定の国や地域を象徴する存在となりうる点において飼育に取り組む意義が見出されていたとみることができる。近年まで、絶滅した在来種と関連づける形で飼育下のオオカミが注目された様子がみられなかったのは、こうした傾向が影響した可能性があると考えられる。

一方、2000年代から飼育されているシンリンオオカミ (*C. l. lycaon*) では、絶滅したエゾオオカミとの関連づけが意図的におこなわれている。これは、直接的には新規に開業した飼育施設のコン

病理解剖に際して一部の破壊を伴ったために主にハンズオン用に活用される資料であり、アンコ【#109】の頭骨であると教示いただいたことがある。

セプトがもたらした変化だが、背景には平成に入ってから日本産の野生動物を飼育・展示することを重視する傾向を強めてきたとされる国内動物園の動向(石田 2010: 193、木下 2018: 236)があるだろう。また、1990 年代以降は日本列島内にオオカミを再導入する構想があることが広く知られるようになり、オオカミに対する一般的な関心が増加した時期にあたる。そうした中で、北海道の公立動物園でオオカミを飼育する意義が見直され、絶滅した在来種と関連づけられる存在である点に価値が見出されるようになったと考えられる。

さらに、カナダに生息するオオカミが遺伝的にエゾオオカミと近縁であることが解明されたことによって、北海道では両者を関連づけて理解することに明確な妥当性が付与されている。ここには、特定の国や地域と結びつきにくい「シンリンオオカミ」という和名²⁶⁾も、より柔軟な理解を助ける形で影響している可能性がある。ただし、過去に同じ和名が用いられていたシンリンオオカミ (*C. l. occidentalis*) ではエゾオオカミとの関連性が意識された様子はみられなかったことから、動物園が飼育する海外産の亜種と在来種との関連づけは、科学的・学術的な知見による裏付けがあってはじめて成立しうると推測するが、この点は今後本州以南の状況を含めて検証する必要がある。

4-2. 繁殖・飼育形態の変遷過程

本稿は、北海道の公立動物園におけるオオカミの繁殖・飼育形態が 1980 年代を境として変化していることを確認した。初期に飼育されたシベリアオオカミでは、単独あるいは繁殖ペアでの飼育が主流であり、ペアの間に生まれた仔は早い段階で外部に搬出されていた。オオカミの親仔の関係性は、過去にはとくに重視されていなかった様子がある。対照的に、1980 年代以降に飼育された亜種では、繁殖に際して母仔と父親個体の同居が試みられ、さらに成育した仔を両親とともに長期間「群れ」として飼育することが志向されるようになった。こうした変化は、本州以南ではより早い時期から起きていた可能性もあるが、日本のオオカミ飼育史における特徴的な現象だったと考える。

北海道の公立動物園でみられたオオカミの繁殖・飼育形態の変化は、日本国内におけるオオカミの生態や生活史にかかる知見の更新と普及の過程を反映して起きたものだったと推測する。国内で出版された文献をみると、おおそ 1980 年代まで、オオカミはペアを基本として生活する動物であり、その「群れ」は、狩りを成功させるという共通の目的のもとに集合した個体やペアによって形

26) 飼育下のオオカミに対する地域・国名を冠した和名の使用は、北海道の公立動物園では、円山動物園が中国から導入したオオカミを「シベリヤおおかみ」として記載(札幌市円山動物園 1961: 22)したことが端緒と思われる。同園は当時「とら」「きつね」など、おもに種名をもって飼育動物を記載していたが、オオカミと同じ食肉目ではほかに「カンフォルニヤあしか」(カリフォルニアアシカ)「にほんぐま」「ほつきよくぐま」「マレージャこうねこ」の 4 種の動物が地域・国名を冠した和名で記載されている。クマ類では「にほんぐま」「ほつきよくぐま」のほかに道内産と思われる「ひぐま」の記載があり、また、「マレージャこうねこ」も同時に「じゃこうねこ」の飼育があることから、飼育・展示に際して園内の動物を区別する名称が必要だったと考えられる。対して、区別すべき同種や近縁種が飼育されていないにも関わらず、地域名を冠した名称で記載されていたのが「カンフォルニヤあしか」と「シベリヤおおかみ」の 2 種である。いずれも在来種としてニホンアシカ、エゾオオカミ・ニホンオオカミが存在し、とくにオオカミについては日本国内の目撃例や生残説がたびたび話題(平岩 1981: 282)となってきたこともあって、在来種と明確に区別することが求められたと考えられる。円山動物園が区別しようとした対象がエゾオオカミだったのかニホンオオカミだったのか、また、動物園が飼育するオオカミの亜種に対する和名の付与とその法則については別に検討する必要があるが、海外の特定の地域や国の名称と強く結びつく和名が与えられてきたことは、結果的に飼育下のオオカミを海外の動物として位置づける傾向を強化し、絶滅した在来種と関連づけてとらえる機会を生じにくくさせていた要因のひとつだった可能性がある。

成される集団とされていた(平岩1981:18)。過去の動物園でとられていた繁殖・飼育形態は、当時一般的だったオオカミの生態や生活史にかかる知見を反映したものだったと考えられる。また、日本では古来「群れ化」したオオカミが人々から恐怖の対象とされてきた(菱川2009:122)。在来種の絶滅後も「オウカミは夏は雌雄二匹でくらし、冬はたくさん集まっています。ですから、オウカミのおそろしいのは冬です」(今泉1949:36)と明言されるほど、獲物が減少する冬期に飢えた個体が集まって群れを形成する生態こそが「おそろしい」オオカミのイメージにつながる要素のひとつとなっている。

こうした過去の知見やイメージに対し、野生下での観察や研究の進展により得られた新たな情報が海外からもたらされ、野生動物としてのオオカミに対する理解のありかたが更新されてきた経緯がある。群れをなすオオカミが人にとっての脅威であると受け取られることは現在でも変わりはないが、近年では動物園で飼育されるオオカミが「家族愛」や「一家のきずな」(小坂2008:25)といったキーワードをともなって報じられることがあるように、オオカミの群れが飢えた個体の寄せ集めではなく、「親子」や「一家」であるとする見解を受け、「家族が群れとして」寄り添い、協力しあって生きる生態にこそ魅力があると考えられている様子がある²⁷⁾。ただ、こうした理解がいつごろから普及してきたのかはよくわかっていなかった。

この点について、本稿は、海外で解明されたオオカミの生態や生活史に関わる知見が書物を通じて日本国内に受容され、それが動物園のオオカミの繁殖・飼育形態を変えるほどに普及したのが1980年代前後だったのではないかと考える。中村(1998:93)は、北米では1950年代から1960年代に出版された「オオカミの認識を変えた3冊の本」を通じて野生下のオオカミの生態・行動に関する情報が発信され、オオカミが「優雅で魅力に富む動物」であると伝えられるようになったことで人々のオオカミ観が変化したと述べている。加えて、この3冊のうちの2冊が1970年代までに日本国内で翻訳出版されたことも紹介している。北海道の公立動物園におけるオオカミの飼育に関する文献では、小菅(2013:117)が、1990年に旭山動物園でシンリンオオカミ(*C. l. occidentalis*)がはじめて繁殖した際、それまで前例がなかった母仔と父親個体の同居を試みたのは、「オオカミは夫婦で子育てをすると野生の観察記録には書いてある」ためだったと述べている。

道内の公立動物園におけるオオカミの繁殖・飼育形態の変化や展示を通じて発信される情報は、人々がオオカミに対して持つ知見やイメージの更新をうながすきっかけともなってきただろう。本

27) ただし、現在では、オオカミの社会システムの基本が群れにあることは間違いないが、その生態の多様さが明らかになるにつれ、必ずしも群れでの生活が絶対視されるわけではない、とする複雑な形での理解が進みつつある。ミクロシ(2014)がイヌ属にかかわる知見を広くまとめた中では、オオカミは動的で可変的な社会システムを有し、さまざまな集団構造をつくりあげる能力をもつ動物であると論じられると同時に、地域によって個体数の90%を単独行動のオオカミが占める場合もあると紹介している(ミクロシ2014:83)。単独で暮らすオオカミが多い地域があることは、幅広い世代に向けて著された桑原(2014:36)でも触れられており、日本でも今後広く認識されるようになる可能性がある。また、野生のオオカミの生息域では、こうした知見が飼育下のオオカミにも反映され、アメリカ動物園水族館協会(AZA)による大型イヌ科動物の飼育マニュアルは、社会構造の柔軟性を前提とし、群れでの飼育を規定していない。集団構成・個体管理にかかる考え方について記載する中では、野生下では単独個体はごく一般的であることに言及し、群れ生活を営むため相性の良い個体がいれば同居飼育が望ましいとしつつも、単独飼育も可能であるとしている(AZA Canid TAG 2012:24)。こうした新規の展開を受けて、日本の動物園におけるオオカミの飼育のありかたも今後さらに変容すると推測できる。新たな展開を適切に予期していくためにも、過去の状況の整理を進め、明確化しておくことが求められると考える。

稿でもみてきたように、動物園で飼育されるオオカミをめぐる主要なできごとは、新聞をはじめとするメディアに取りあげられ、多くは写真を伴って報道されてきた。動物園で飼育されるオオカミは、その飼育施設を訪れなければ感知する機会のない存在として社会から切り離されているわけではなく、飼育下とはいえ地域に実在するオオカミとして一般に意識されてきたと考えられる。

北海道へのオオカミ再導入をめぐる議論の中で、山中ほか(2006:180)は、オオカミに対する社会的受容の可否に関わり、近代以降の生業変化や西欧的なオオカミ観の影響を受けたことでオオカミに対する人々の考えかたは「悪化」しており、在来オオカミの不在期間に定着した要素を変えていくには大変な努力が必要であると指摘している。この点について、本稿は、オオカミに対する人々の考えかたは必ずしも悪化の一途を辿ってきたわけではなく、在来種の絶滅後も野生動物としての実態に即した形で知見やイメージの更新が進んできた部分もあることを明らかにできたと考える。

4-3. 現存する標本・記録の活用

本稿では、過去に道内で飼育されたオオカミのうち、少なくとも5個体が標本資料化されていることを明らかにできた。北海道の気候環境下で生活し、生時の各種実測値等を伴う飼育下オオカミの標本は、絶滅したエゾオオカミの研究において、現存する標本との比較検討対象として重要である。

加えて、道内でみられたオオカミの繁殖記録を集約し、旭川、帯広、札幌のいずれの地域でも、3月下旬から5月上旬に出産のタイミングが集中することを確認した。本州(大阪)出身のフラット【#101】、オプリー【#102】、ジャック【#103】、【#104】のような2月生まれ、カナダ出身のクリス【#113】のような6月生まれの個体がみられなかったことは、エゾオオカミの北海道個体群の生態を検討するうえで有効な材料として位置づけられる。

また、道内の公立動物園がこれまでに蓄積してきたオオカミの飼育記録や技術は、今後、オオカミの再導入をめぐる議論や、計画の実現可能性を検討する中で重要な要素となる可能性がある。北海道へのオオカミ再導入にかかる従来の議論において、これまでに道内で飼育されてきた海外産オオカミや、オオカミの飼育経験を持つ動物園が関わる場面を想定した例は見いだせていないが、再導入に際して不可欠となる飼育下個体群は、おそらく国内の動物園が飼育・管理に関わることになるだろう。

羽山(2012:22)は、将来的にカワウソをはじめとする多くの絶滅した野生動物の野生復帰が日本で計画される時代が来る可能性に触れ、そうした種を安定して存続させるために動物園が取り組む飼育下繁殖の重要性を指摘している。Earnhardt(2014:322)は、「整備された動物園の飼育個体は、再導入の供給源として有益である」とし、野生動物の再導入計画における動物園の役割と飼育下個体群の利用について論じている。現在の北海道で飼育されているシンリンオオカミ(*C. l. lycaon*)は、いずれの地域の野生個体群に由来する集団なのか不明確であり、国内の個体群全体が近年まで遺伝的管理の対象とされていなかった様子があることから再導入計画における供給個体群の候補にはなりえないが、これまでに動物園で蓄積されてきた個々のオオカミの状況に応じた飼育・管理技術、繁殖にかかる手法、また、獣医学をはじめとする種々の専門的な知見は、再導入計画の実現可能性について具体的な議論に取り組む際には欠かせないだろう。加えて、現在のシンリンオオカミ(*C. l. lycaon*)には、数十年にわたって国内で継代飼育を果たしてきたことが確認できる血統²⁸⁾がみられることから、より専門的な観点による分析を通じて、飼育下個体群の管理や保全にかかる視角から今後の議論に寄与できる可能性がある。

大橋（2014：57）は、国内の動物園による希少種の保全活動について論じる中で、動物園がこれまでに蓄積してきた飼育繁殖技術の活用や動物園間の連携の重要性を指摘している。オオカミについても、今後、再導入に関する議論が続けられる中で、実際に復元された場合を想定し、希少種としてどのような形で持続的な管理や保全を果たしていくことが望ましいのか検討される可能性がある。遺伝的多様性の確保をはかるためには、たびたび海外から個体を導入することが求められると同時に、飼育下個体群を形成して保全に取り組む必要があるが、その際には、オオカミの飼育経験を有する動物園の記録・技術が活用され、また、従来の繁殖を進める中で連携してきた国内外の飼育施設間のネットワークが重視されるところを考えると考える。

オオカミの飼育にかかる記録、知見、技術について、北海道の公立動物園はすでに長期にわたる蓄積が存在する。今後は、それぞれの拡充と継続的な蓄積が望まれるとともに、既存の記録やデータ等を体系的に整理し、資料化を進めていくことが求められると考える。

5. おわりに

本稿は、北海道の公立動物園がこれまでに飼育してきた海外産オオカミの記録を整理し、関連文献の情報とあわせてまとめることで、飼育史における主要な動向と特徴を確認した。

道内の公立動物園は、1956年から2022年現在までに5亜種128頭のオオカミを飼育してきた。飼育下のオオカミは、過去には海外産の野生動物として位置づけられていたが、現在飼育が続くシンリンオオカミ（*C. l. lycaon*）では、絶滅したエゾオオカミと関連づける形での飼育・展示がおこなわれていることを確認した。また、北海道の公立動物園は、過去にはオオカミを単独あるいはペアで飼育していたが、1980年代以降は複数頭を群れとして飼育・展示することを目指してきたことを明らかにできた。こうした変化は、現在までのオオカミに関する知見の更新や議論の蓄積を反映していると考えられる。

今後は、本稿で明らかにできたオオカミの飼育状況や個別の論点について具体的な検討を進めるとともに、対象と時間の範囲を広げ、北海道におけるオオカミの飼育史全体の解明に取り組むことが課題となる。また、本稿で確認した亜種について、それぞれの創始個体の出身施設から遡って具体的な産地を把握することがかなえば、絶滅した在来種との比較検討において、より妥当性のある分析・議論を進めていくために有効な材料とすることができると考えている。

本稿は北海道の公立動物園におけるオオカミの飼育史を概観し、過去からの変化が確認できた要素とその変化の過程を明らかにした。しかし、こうした変化や飼育下のオオカミの存在が実際に北海道の人々のオオカミ観や受容の度合いにどの程度の影響力を有するものなのかを検討するには至らなかった。そのため、飼育史の解明とはまた別の形で、オオカミの飼育や展示のありかたが社会に対して与えてきた影響を評価する試みを進める必要があると考えている。

28) 鹿児島市平川動物公園は、旭山動物園出身のミナ【#124】と円山動物園出身のショウ【#120】をシンリンオオカミ（*C. l. lycaon*）の繁殖ペアとして飼育している。2022年4月28日に出産があり、5頭の仔が成育している（梅山2022：23）。いずれも国内継代個体となるが、このうちショウ【#120】は、注17、18に前掲したチャンプとナッツの子孫にあたる。

謝辞

本稿は、北海道大学・大学院文学研究科（現在は大学院文学研究院）の博士課程在籍中に実施した調査内容に基づき、新たに得られた記録・情報を追加してまとめたものです。

本稿を作成するにあたり、旭川市旭山動物園、おびひろ動物園、群馬サファリパーク、札幌市円山動物園、とくしま動物園、富山市ファミリーパーク、名古屋市東山動植物園、姫路セントラルパークから各園で飼育されてきたオオカミに関する貴重な情報・データのご提供を賜りました。また、閉園した宝塚ファミリーランド（宝塚動植物園）で飼育されていたオオカミの記録を調べる中で阪急神戸ホールディングス株式会社、阪急電鉄株式会社のご協力を賜りました。

円山動物園で過去に飼育されたシベリアオオカミの標本調査では、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園のお世話になりました。

紙数の関係から御担当者様のお名前を個別に挙げることはできませんが、御協力と御高配に心から深く感謝申し上げます。

最後に、本稿の投稿に際し、匿名の査読者の方々からの確なご指摘・ご助言と大変有益なコメントをいただきました。ここに記して謝意を表します。

なお、当然のことながら、本稿における誤りはすべて筆者のみの責任に帰すものです。

参考文献一覧

- 秋田市役所 1987 「オオカミとエゾシカ動物園に仲間入り」『広報あきた』 1072, p.2.
- 旭川市旭山動物園 2009a 「平成 21 年 2 月『クリスの悲報』」 <https://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyamazoo/news-blog/genchannikki/d05514512301.html> (2022/9/25 閲覧).
- 旭川市旭山動物園 2009b 「マースの負傷、クリスの死」『モユク・カムイ』 73, p.2.
- 旭川市旭山動物園 2009c 『旭山動物園動物図録』 旭川振興社.
- 旭川市旭山動物園 2016a 「『スプリ』『カント』『ミナ』がバックヤードの飼育に変わりました」 https://asahiyamazoolshiikunews.blogspot.com/2016/01/blog-post_24.html (2022/9/25 閲覧).
- 旭川市旭山動物園 2016b 「シンリンオオカミとカナダヅルが引越しました」 <https://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyamazoo/news-blog/breeding-news/d056454.html> (2022/9/25 閲覧).
- 旭川市旭山動物園 2016c 「シンリンオオカミ『カント』の死亡について」 <https://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyamazoo/news-blog/breeding-news/d058712.html> (2022/9/25 閲覧).
- 旭川市旭山動物園 2018 「シンリンオオカミが来園しました」 <https://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyamazoo/news-blog/breeding-news/d064172.html> (2022/9/25 閲覧).
- 朝日新聞社 1997 「ふるさと発」『朝日新聞』 1997 年 2 月 21 日 33 面.
- 朝日新聞社 2010 「街角きりり」『朝日新聞』 2010 年 6 月 12 日 32 面.
- 旭山動物園動物図書館 2011 「オオカミにつきをつくろう」『どうぶつえんみにだより』 9, n.page.
- 荒木薫, 佐分孝, 岸田正美, 西泰司, 田中繁信 1983 「シンリンオオカミの繁殖について」『動物園水族館雑誌』 25 (1), pp.11-15.
- 石川実和 2018 「札幌・円山動物園 30 種飼育取りやめへ」『北海道新聞』 2018 年 8 月 8 日 1 面.
- 石黒直隆 2012 「絶滅した日本のオオカミの遺伝的系統」『日本獣医師会雑誌』 65 (3), pp.225-231.
- 石田戡 2010 『日本の動物園』 東京大学出版会.
- 伊藤直美, 中村悟 1969 「シベリヤオオカミの繁殖」『動物園水族館雑誌』 11 (1), pp.19-22.

- 犬飼哲夫 1932 「北海道の動物の由来とその変遷」『北海道郷土史研究』, pp.32-50, 日本放送協会北海道支部.
- 井上剛, 桑原康生, 向井猛, 上野浩, 弓山良 2008 「P122 札幌市円山動物園の新施設『エゾシカ・オオカミ舎』」『日本哺乳類学会大会プログラム・講演要旨集』 p.161.
- 今泉忠明 1995 『絶滅野生動物の事典』 東京堂出版.
- 今泉吉典 1949 『百獣ものがたり』 学習研究社.
- 梅木佳代 2016 『北海道大学大学院文学研究科研究論集』 15, pp.35-67.
- 梅山崇 2022 「シンリンオオカミ」『毎日新聞』 2022年5月22日 23面.
- 大阪市天王寺動物園 1966 「動物園ニュース」『なきごえ』 11, p.7.
- 大阪市天王寺動物園 1981 「動物園ニュース」『なきごえ』 17(11), p.11.
- 大阪市天王寺動物園 1983a 「動物の親善大使」『なきごえ』 19(4), pp.2-3.
- 大阪市天王寺動物園 1983b 「7・8月の動物園日記」『なきごえ』 19(9), pp.4-5.
- 大阪市天王寺動物園 1991 「6月の動物園日記」『なきごえ』 27(8), pp.8-9.
- 大阪市天王寺動物園編 1985 『大阪市天王寺動物園70年史』 大阪市天王寺動物園.
- 太田国彦, 北上田剛, 鈴木彩子 2022 『岐路に立つ「動物園大国」』 現代書館.
- 大橋直哉 2014 「希少種の保全」『動物園学入門』, pp.55-59, 朝倉書店.
- 落合知美, 綿貫宏史朗, 鶴殿俊史, 森村成樹, 平田聡, 友永雅己, 伊谷原一, 松沢哲郎 2015 「日本におけるチンパンジー飼育の初期の歴史: 1920-1950」『霊長類研究』 31, pp.19-29.
- おびひろ動物園 1978 『おびひろ動物園15年のあゆみ』 おびひろ動物園.
- 金田寿夫 1992 『円山動物園の愉快な主役たち』 北海道新聞社.
- 嘉納光邦 1999 「シンリンオオカミ」『動物園へ行こう』, pp.28-29. 琉球出版社.
- 亀山明子 2006 「北海道におけるエゾオオカミ絶滅の歴史と知床国立公園におけるオオカミ再導入の可能性について」『世界自然遺産 知床とイエローストーン』, pp.87-89, 知床財団.
- 菅野浩 1997 『きたの動物園』 旭川振興公社.
- 菊間史織 2021 『「ピーターと狼」の点と線』 音楽之友社.
- 木下直之 2018 『動物園巡礼』 東京大学出版会.
- 木村直人 2011 「『ユウキ』と『ショウ』オオカミ兄弟 よろしく」『北海道新聞』 2011年7月10日 31面.
- 桑原康生 2014 『オオカミの謎』 誠文堂新光社.
- 郡義之 2007 「円山動物園北方圏ゾーンを整備」『北海道新聞』 2007年5月31日 33面.
- 古賀忠道 1957 『上野動物園』 三省堂.
- 小坂洋右 2008 「オオカミなぜ人気？」『北海道新聞』 2008年8月8日 25面.
- 小菅正夫 2013 『僕が旭山動物園で出会った動物たちの子育て』 静新社.
- 小菅正夫, あべ弘士 2009 『旭山動物園物語 オオカミの森』 角川書店.
- 斎藤茂洋 2008 「開拓前の『オオカミの森』復活」『朝日新聞』 2008年6月28日 4面.
- 斎藤茂洋 2009 「ひと 坂東元さん」『朝日新聞』 2009年5月27日 2面.
- 札幌市環境局円山動物園経営管理課 2013 『平成25年度版事業概要』 札幌市円山動物園.
- 札幌市環境局円山動物園経営管理課 2020 『令和2年度版事業概要』 札幌市円山動物園.
- 札幌市円山動物園 1961 『札幌市円山動物園10ヶ年の歩み』 札幌市円山動物園.
- 札幌市円山動物園 1980 『さっぽろ円山動物園30年のあゆみ』 建設局円山動物園.

- 札幌市円山動物園 1984 「ボクたち“なかよし外交官”」『さっぽろ円山動物園だより』30, pp.1-2.
- 札幌市円山動物園 2007 「第2回市民動物園会議平成19年11月30日開催：会議録」<https://www.city.sapporo.jp/zoo/topics/2007shimindoubutsuenkaigi.html> (2022/9/25 閲覧).
- 札幌市円山動物園 2013a 「シンリンオオカミ『キナコ』の死亡に伴いエゾシカ・オオカミ舎を閉鎖しておりましたが、1月11日から展示を再開いたします」<https://www.city.sapporo.jp/zoo/topics/topics2-691.html> (2022/9/25 確認).
- 札幌市円山動物園 2013b 「シンリンオオカミの死亡事故に関する改善について」<https://www.city.sapporo.jp/zoo/topics/ookamisiboujikokaizenn.html> (2022/9/25 閲覧).
- 札幌市円山動物園 2017 「シンリンオオカミの『ユウキ』が転出します」<https://www.city.sapporo.jp/zoo/shinnrinnookamiyuki.html> (2022/9/25 閲覧).
- 札幌市円山動物園 2019a 「シンリンオオカミの『ルーク』が亡くなりました」<https://www.city.sapporo.jp/zoo/03doubutsu/02ezoshikaookamisya/sinrinookami/r1/20190508.html> (2022/9/25 閲覧).
- 札幌市円山動物園 2019b 「札幌市円山動物園基本方針『ビジョン2050』」<https://www.city.sapporo.jp/zoo/info/keikaku/role.html> (2022/9/25 閲覧).
- 札幌市円山動物園 2019c 「飼育展示動物種分類一覧(詳細)」<https://www.city.sapporo.jp/zoo/info/keikaku/doubutusyu.html> (2022/9/25 閲覧).
- 札幌市円山動物園 2019d 「シンリンオオカミの『ショウ』が鹿児島市平川動物公園に転出します」<https://www.city.sapporo.jp/zoo/03doubutsu/02ezoshikaookamisya/sinrinookami/r1/20191009.html> (2022/9/25 閲覧).
- 札幌市円山動物園 2022 「シンリンオオカミ『ジェイ』が死亡しました」<https://www.city.sapporo.jp/zoo/topics/2022wolf-j.html> (2022/9/25 閲覧).
- 札幌市円山動物園経営管理課 2009 『平成21年度版事業概要』札幌市円山動物園経営管理課.
- 佐藤元治 2006 「円山にも春待つ顔」『北海道新聞』2006年3月22日24面.
- 生涯学習部生涯学習文化室動物園管理係 2020 「動物園日記(平成9年)」<https://www.city.obihiro.hokkaido.jp/zoo/nikki/1006710/1006732.html> (2022/9/25 閲覧).
- ジンマー, カール 2012 「生物の種とは何か」『別冊日経サイエンス185』, pp.20-29, 日経サイエンス.
- 須田知樹 2007 「崩壊する生態系」『オオカミを放つ』, pp.22-51, 白水社.
- 立野将弘 2014 「17歳『コウゲツ』天国へ」『毎日新聞』2014年12月10日24面.
- 辻栄 1990 「飼育研究レポート」『モユク・カムイ』21, p.2.
- 東京都, 恩賜上野動物園 1982a 『上野動物園百年史』東京都, 恩賜上野動物園.
- 東京都, 恩賜上野動物園 1982b 『上野動物園百年史 資料編』東京都, 恩賜上野動物園.
- 十勝毎日新聞社 1967 「カバやトナカイ旭川動物園に戻る」『十勝毎日新聞』1967年6月14日3面.
- 十勝毎日新聞社 1968 「本社主催動物園子供まつりも」『十勝毎日新聞』1968年4月29日5面.
- 十勝毎日新聞社 1973 「人工哺乳で元気に育つ」『十勝毎日新聞』1973年8月24日7面.
- 十勝毎日新聞社 1978 「動物の『愛称』決まる」『十勝毎日新聞』1978年5月19日9面.
- 十勝毎日新聞社 1979 「オオカミ雌雄2頭」『十勝毎日新聞』1979年9月27日11面.
- 中上志保 2011 「ZOOっとそばに到津の森」『ひろば北九州』297, pp.48-49.
- 中沢広美 2012 「オオカミの家族」『北海道新聞』2012年7月6日27面.

- 中村生雄 2010『日本人の宗教と動物観』吉川弘文館.
- 中村一恵 1998「オオカミの認識を変えた3冊の本」『オオカミとその仲間たち』, p.93, 神奈川県立 生命の星・地球博物館.
- 中村征太郎 2010「愛称は『ルーク』に」『北海道新聞』2010年8月1日29面.
- 中村亮平 2016「動物園獣医学の実際～旭川市旭山動物園から」『北海道獣医師会雑誌』60, p.440.
- 西村武文 2000「熱い日々を送るやさしいオオカミの夫婦」『いとうづゆうえん日記』, pp.10-11, 西日本リビング新聞社.
- 日動水協運営委員会教育指導部編 1992『飼育ハンドブック資料編・分冊1:長期飼育記録含水族』日本動物園水族館協会.
- 橋川央 2011「東山の種保存動物 vol.17:オオカミ」『ひがしやま』17, pp.4-5.
- 八田三郎 1913「北海道の狼」『動物学雑誌』291, n.page.
- 原田佳 2021「旭山動物園わくわく日記」『北海道新聞』2021年6月6日15面.
- 羽山伸一 2012「野生動物と共存するために」『野生との共存』, pp.11-23, 地人書館.
- 坂東元 2014『ヒトと生き物 ひとつながりのいのち』天理教道友社.
- 菱川晶子 2009『狼の民俗学』東京大学出版会.
- 平岩米吉 1981『狼』池田書店.
- 福田道雄 1997「日本におけるペンギンの飼育史試論」『動物園研究』2, pp.30-47.
- 北海道新聞社 1956「シベリア・オオカミ仲間入り」『北海道新聞』1956年7月12日8面.
- 北海道新聞社 1966「こだま」『北海道新聞』1966年11月12日15面.
- 北海道新聞社 1980a「オオカミが来るヨ」『北海道新聞』1980年1月5日12面.
- 北海道新聞社 1980b「人気もの間違いなし」『北海道新聞』1980年1月27日14面.
- 北海道新聞社 1981「オオカミ夫婦にっこり?!」『北海道新聞』1981年11月20日14面.
- 北海道新聞社 1982a「“姉妹”もスクスク」『北海道新聞』1982年7月3日18面.
- 北海道新聞社 1982b「動物の世界もトレードの季節?」『北海道新聞』1982年11月23日19面.
- 北海道新聞社 1983「クロオオカミすごみ」『北海道新聞』1983年12月17日19面.
- 北海道新聞社 2000「ひとり暮らし」『北海道新聞』2000年10月06日28面.
- 北海道新聞社 2002「シンリンオオカミ登場」『北海道新聞』2002年12月27日.
- 北海道新聞社 2007「オオカミの迫力たっぷり」『北海道新聞』2007年10月17日32面.
- 北海道新聞社 2008「駆ける野生」『北海道新聞』2008年6月26日26面.
- 北海道新聞社 2009「『オオカミの森』雌のクリス死ぬ」『北海道新聞』2009年2月11日21面.
- 北海道新聞旭川支社 1972「動物園だより」『北海道新聞:旭川版』1972年7月15日14面.
- 本庄彩芳 2008「3施設オープン」『北海道新聞』2008年4月11日23面.
- 毎日新聞社 2002「姉妹のオオカミ」『毎日新聞』2002年12月22日21面.
- マックロー, R・デール 2006「知床国立公園における野生動物管理」『世界自然遺産 知床とイエローストーン』, pp.165-174, 知床財団.
- 真野森作 2006「悲しき遠吠え」『毎日新聞』2006年5月17日6面.
- 丸山直樹 1994「IUCN オオカミ専門家会議」『フォレスト・コール』1, pp.10-13.
- ミクロシ, アダム 2014〔藪田慎司監訳〕『犬の動物行動学』東海大学出版部.
- 宮下実 1993「天王寺動物園におけるオオカミの歴史」『動物文学』59(1), pp.12-14.
- 山田伸一 2011『近代北海道とアイヌ民族』北海道大学出版会.

- 山中正実, 梶光一 2006 「イエローストーンからの提言を受けて」『世界自然遺産 知床とイエローストーン』, pp.175-182, 知床財団.
- 弓山良 2010 「この個に注目」『市民 ZOO ネットワーク NEWS LETTER』 30, p.9.
- 米田政明 2006 「知床に再導入したオオカミを管理できるか」『知床博物館研究報告』 27, pp.1-8.
- 読売新聞社 2006 「スポットライト」『読売新聞』 2006 年 10 月 13 日 35 面.
- 読売新聞社 2010 「シンリンオオカミ『ナナ』逝く」『読売新聞』 2010 年 2 月 21 日 28 面.
- 渡邊則行 2000 「オオカミ舎」『札幌文庫 92: 円山動物園』, p.66, 札幌市.
- 渡辺守男 2000 「メディアとしての動物園」『動物園というメディア』, pp.10-52, 青弓社.
- 渡部宏人, 近藤卓資 2007 「ひと 小菅正夫さん」『毎日新聞』 2007 年 1 月 31 日 3 面.
- AZA Canid TAG. 2012. *Large Canid (Canidae) Care Manual*. Association of Zoos and Aquariums.
- CITES. 2022. "Appendices", <https://cites.org/eng/app/appendices.php> (2022/9/25 閲覧).
- Earnhardt, Joanne M. 2014 「再導入における飼育下個体群の役割」『動物園動物管理学』, pp.318-332, 文永同出版株式会社.
- IUCN. 2018. "Grey Wolf", <https://www.iucnredlist.org/fr/species/3746/163508960> (2022/9/25 閲覧).
- Kreeger, Terry J. 2003. "The Internal wolf". in *Wolves: behavior, ecology, and conservation*. L.D. Mech and L. Boitani, ed. University of Chicago Press. pp.192-217.
- Nowak, Ronald M. 2003. "Wolf Evolution and Taxonomy". in *Wolves: behavior, ecology, and conservation*. L.D. Mech and L. Boitani, ed. University of Chicago Press. pp.239-258.
- Soorae, Pritpal S. 2021. "Global conservation translocation perspectives: 2021. Case studies from around the globe", IUCN Library System, <https://portals.iucn.org/library/node/49298> (2022/9/25 閲覧).

The history of captive foreign wolves (*Canis lupus*) in public zoos in Hokkaido

Kayo UMEKI

(Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University)

The purpose of this paper is to describe the history of captive foreign wolves (*Canis lupus*) kept in public zoos in Hokkaido, Japan.

The Hokkaido wolf (*C. l. hattai*), a native subspecies of Hokkaido, became extinct around 1900 due to hunting pressure. This paper is part of a study aimed at clarifying the process of change in attitudes toward wolves that occurred in Hokkaido after the extinction of native subspecies.

In the 1956, public zoos in Hokkaido began keeping wolves from foreign countries. To date, a total of 128 wolves of five subspecies (*C. l. albus*, *C. l. chanco*, *C. l. lupus*, *C. l. lycaon*, *C. l. occidentalis*) have been kept.

While it is impossible to study wolves in the wild in Hokkaido, where native subspecies have

become extinct, the general understanding of wolves as wildlife and their ecology has been updated from the past by records and information brought from abroad. This paper points out that this process of change in understanding can be seen in the way wolves are kept and exhibited in zoos.